

冬 雷

短歌雑誌

TOURAI



二〇二四年七月一日発行（毎月一回一日発行）
第六十三巻第七号（通巻七四九号）

7月号・2024年

冬雷大会のご案内

第63回冬雷大会は、今回もホテル・ルートイン東京（東陽町）にて開催予定です。地下鉄「東西線・東陽町」下車徒歩三分です。

日時 十月二十日（第三日曜日）

午前十時 開会

午後四時半 閉会

午後五時より 懇親会

* 本年は好評でありました特集「誌上冬雷大会」の企画はありません。是非とも会場の方へ御足をお運びください。

大会参加費用

参加費 一〇〇〇円（会場費分担）

昼食代金 三〇〇円

懇親会参加者 八〇〇円

（当日受付にてお支払い下さい）

〈冬雷短歌会〉

7月号 目次

冬雷集	1
作品一	18
七月集	34
残響集	38
作品二	46
作品三	56
五月号冬雷集評	山本三男 14
『四斗樽』刊行以前の太田行蔵（最終回）	大山敏夫 15
五月号作品一評	小林芳枝・藤田夏見 32
五月集 / 残響集評	ブレイクあずさ 40
島木赤彦の一首鑑賞 5	井上楨子 41
五月号作品二評	井上莒子・江波戸愛子 42
五月号作品三評	桜井美保子・橘 美千代 44
五月号十首選（冬雷集・五月集 / 残響集）	46
五月号十首選（作品一・作品二・作品三）	48
歌集・歌書紹介	佐藤靖子 51
歌集『木曽の川霧』市田柳子著	桜井美保子 56
歌集『風の音』佐々木伸彦著	小林芳枝 59

冬雷集

大山敏 夫 埼玉

モグラ叩きの喩がぴつたりのやうに続く虫歯の治療に半年かよふ
禍根はこれかと思ふ塊を夜ごと揉み解し不眠やはらぐ

癒着して執拗に解れ難きもの人間の場合には厄介なのみ

よく眠れたといふをひさびさ味はひぬたかだか四時間余りながらも
避けられぬと云はれる遺尿失禁は氣にかけずをればほとんどあらず

豚の膀胱は薄いさうだよドクターが言ひたる意味に少し拘る

肉体に中心といふべきところあるを感じをり横たはりつつ

成長の著しき若き日の肉体の如き痛みあり寝れば夜夜

赤間 洋子 東京

新緑の青梅丘陵を歩く会我也参加し一万五千歩余り

出発時小雨が降るもすぐ止みて我には辛き上り坂行く

山歩きスキーも得意と云ふ男性はリーダーと共にぐんぐん歩く

山桜所々に咲きてをり著莪の大きな群落も見ゆ

豆乳ソフトクリーム屋の側で小休止我は買はねど食べる人あり

小休止とりたる後は少し歩き金の淵公園にて昼食休憩

多摩川を目の前にして食す握り飯皆と食べればとりわけ旨し

公園の端には古民家建ちてをり古き農機具懐かしみ見る

石臼で祖母が米挽きだんご作る幼き頃を思ひ出したり

何時までのこと

赤羽佳年 東京

家を出ぬ日の多くなるこの頃は歌の稿正す時間充分

わが命何時までならむ明日知らず今日の寢床に手足を伸ばす

われながら呆れてしまふ身の重さ椅子より立つに攔まり立ちする

なに一つ誇れるものの無き者に楽しみ一つみじかうたあり

原産地中国にあり花の王と呼ばれる牡丹は今盛りなり

空暗くひと日細き雨降り続き走りの梅雨か昨日今日の雨

早朝に梅雨の走りか湿り持つ外気が絡む素肌の小手に

兼目 久 栃木

真夜中に天井見つつこの家は大工になりし亡兄が建てし

三人分飛行機の席を使ふと言ふ大谷選手飛行機移動

くもり日に桜並木を見つつ行く幹や枝は黒く見ゆるも

素足にて稲を植ゑたる子供らは水につかるに奇声をあげたり

一位の木道路に面し半ば出るを妻は植木屋に半分切れと

堰堤に桜咲くを歩き見るくもり空には花のみ明るし

花終りブルドーザーが集めたり桜の花を吸ひこむ音して

桜花散りたる後はハナミヅキ咲く花を愛でつつ車走らす

わが母がみまかりし時寿命だと言ひし兄は今亡きなり

山崎英子 東京

半年振り娘上京に賑はひてあれやこれやと話は尽きず

見下ろしの樟の若葉のきらきらと輝く生気しみじみ見てをり

ベランダにバラの小花の淡紅がプランター埋め咲き盛りをり

園庭の真鯉緋鯉の鯉のぼり雨にぐつたり濡るるがままに

大き花形のカーネーション豊かに飾る二十本程を

転ぶことイコール寝たきりにならむ氣をつけ歩く尚慎重に

達筆な友でありしが字が書けないと嘆きをり電話に励ます

いつも思ふは字が書ける本が読めるを何よりの幸と思はむ

穏やかに一日終れば先づ感謝小さき事にも心通ひて

森藤ふみ 東京

桜散りハンカチの木に芽吹く葉のしつかりとして風に揺らげり

白き苞二枚の開く真ん中にまるき花ありハンカチの木は

傍に居る人に声かけ話するをがたまの木は知らぬと言へり

をがたまの花を見たしと言ふ人と花の巡りを連れ立ち歩む

テーブルに粽の二本置かれあり夕べ娘の貰ひきたれる

巻かれある蘭草の紐をほどきゆく緑濃き笹しつとりとして

笹の葉の匂ひ微かな三枚をむけば出で来る黒糖の餅

かたちよき円錐形の粽餅やさしき甘さ黒糖の味

有泉泰子 山梨

ボランティア短歌と共に励みたる友の急死にふるへ止まらず

歌会終へ又ねと手を振り駅前で別れし友の笑顔はなれず

「甲府市は希望呼ぶ町」と曲流れ子等の歸りて一人空を眺む

藤の花咲き初め窓の染まりたり風にゆられて紫をどる

何処より集ひ来たるかみつ蜂の右に左に藤のみつ吸ふ

今朝もまた「ミミファソソファミレ」ときこえくるたどたどしきも喜びの歌

八十七歳の生徒は初めてと驚くも受け入れくれしピアノの教師

しばみいく吾が身をよそに生々と片附けウォーキング夫は動きをり

当番日 櫻井一江 東京

シニア宅廻り居るらし突然に警官二人の訪問を受く

びしよ濡れの合羽のままの警官は玄関先にて詐欺注意の談

警官の置きゆくチラシ二枚にはサポート詐欺と飛び込み営業

全国交通安全運動周知にと町会ごとの幕舎が一役

警官の交通整理の笛の音は春の嵐を突き抜け透る

二〇m余の車道行き交ふ大小の車は風雨を物ともせず

公園の桜は嵐に抗へずレース編みの如き模様なし飛ぶ

車イス気丈に動かし歩車道の段差すんなり越え来たる人

富田 眞紀恵 富山

賑やかに女ばかりの姉妹でありし昔をなつかしむ吾

姉二人妹一人にかこまれた少女の昔をなつかしむ吾

父母や姉と見上げし桜花まなこ閉づればハラハラと散る

子がくれし花に小さくおやすみと声かけ今日も床につく吾

黒田 江美子 千葉

神楽舞の巫女を描きて遺したる姉の覚悟の日々を思へり

緋袴と千早の白の徹かに映えて鎮もる遺作巫女舞画

大振りの花簪を壮麗に描き遺さる面は孫似に

家庭人趣味人らしも幾度か亡き姉の言強し「奢るな」と

混み合へど旅のニュースのうらやまし夕餉は鯛の焼き物にせん

店頭に低く大きく響きたる主の売り声「今日は鯖よ」と

初に見る五十センチは優に超え鯖は盥を狭しと置かる

繰り返し店主は岩手の鯖をと美味を述べつつ鯖を捌く

小一時間掛けて馴染みの店に来て鯖一尾を購ふもリアル

青木 初子 神奈川

夏野菜庭に一つも植ゑあらず春より媼の体調悪しきか

採れたての庭の胡瓜を届けくれし媼の姿近ごろ見えず

道に添ひ並べ置きたる花鉢の枯れたる姿今年初めて

フルタイムに働く娘に庭仕事無理と思ひつつ為すすべあらず

花鉢の置く場所限られ百合の花減らしトマトの苗増やしたり

掘り上げたる球根あまりに小さくてチューリップの花来年望めぬ

矢車草植ゑたる覚えあらざれど二本芽を出す花鉢の中

飛び来たる種は好みの土選び二本芽を出す矢車草は

井戸水を何度も汲みて往復す鉢の植物いつの間にか増す
災害時役に立ちし井戸水は平時は専ら庭の水やり
強風に畑の土の舞ひ上がり道路に流れ視界不良とす
低緯度の日本各地にオーロラ出て太陽フレアの仕業と聞きぬ
オーロラを明るきニュースと伝へゐるテレビに違和感われ胸騒ぎす
オーロラの赤きは地震の前触れか前例あるらし遙か昔に
草刈り機今年は五月から出動す畑の草の短きうちに
馬鈴薯の蕾の膨らみ紫の花弁が畑の一角を染む

中也幻想

道端で拾ひしボタン捨てがたく今ブルゾンの右のポケット
わがうへに降りくる雪は牡丹雪はらへど直に冷えをはこびく
十七で同棲したる中也をり同じ年ごろの吾たわいなし
三つうへの女優と暮す中也への淡き羨望抱くわれをり
同棲の人は秀雄に走れども中也の憤懣うすれても失せず
今どきの生徒と思ふ電車にて頬よせスマホほほゑみもせず
前二人窓側の人もスマホせず稀な光景われは暮の本
窓側の和服の人の読む雑誌三十一文字が頁にならぶ

異常なる夏日を受けて赤々と庭を彩る霧島つつじ

溢れるほど花を散らしてみどり葉に大きく覆わる霧島つつじ
強風に煽られ舞い来る屋敷樹の落葉の酷く庭に渦巻く
我が腕に抱かれ逝きし姑の命日近く牡丹咲き初む
連れ立ちて嫁御と孫とで墓参り五月四日は姑の命日
彼是と世話やく我に「解った」と墓参の一式孫は持ち行く
腰痛に墓まで行けず仏壇に供え物して仏花を飾る
姑の植えたる牡丹早々と命日待たずに花の落ちゆく
毅然たる姑の姿勢を偲ぶなり天に召されしは百と一歳

四月末庭のキンカン採り乍ら故郷で育たぬことを思へり
揚羽蝶この春初めて庭にきて菜の花の中ゆつくりまはる
シクラメン紫混る赤さにて揃ひて咲けりダンスする様
一人では外出しない夕方は空眺めては若き日思ふ
名和町の住雲寺の藤見に行くと誘はれてゆく夕方の道
幹太くかかへきれない藤の木に広がる枝の広くすばらし
夕方の空の彼方に夕方の島根も明るし孫住む所
人々は低き声にて語り合ひ皆見上げをり夕方の藤

神代植物公園

連休の明けたる平日友たちと神代植物公園に行く
花落ちたなんじゃもんじゃを惜しみつつ元三大師の本尊拝む

あでやかな大輪並ぶバラ園の四百種類は炎天下にあり
温室のサボテン、ベゴニア、洋ランや熱帯スイレン鮮やかなる色
木陰道歩みて香り良きあたり梅檀の太木に小花びっしり
トチノキとベニバナトチノキ並び立つ花房大きく白と赤とが
ユリの木の花懐しく見上げれば大木五本に数多の花あり
熱々の小さき饅頭はおおれば蕎麦の香りのほのかに旨し

宇治にて

天野 克彦 大阪

人の手に矯正されたる藤の花ひと群がれり蜂の如くに（平等院藤棚）
頼通がここに描きし死生観われ救はれき来迎図絵に
直ぐに立つ幹の明るき五月かな誰も己の死は見えぬもの
めぐりきたるみどり萌えでる早苗月そのしのめに君みまかりき
わが腕の中にて息を止めし君たちまち失せぬ紅きくちびる
邪氣のなき笑顔さやかな君なりき唯一筋にわれに頼りき
釈迦は言ふ「愛するものを持つ勿れ」然れどされどわれは生き来つ
宇治川の早き流れにもの思ふあと幾ばくぞこの世の旅は

金沢

高松 美智子☆ 栃木

枝揺らすミモザの黄花も菜の花も日向に溢るる黄の明るさよ
震災もコロナの記憶も喉元を過ぎたるごとくに金沢の街
藩制の町割り残る城下町と茶屋の主は古地図を広げる（にし茶屋街華の宿）
戦火災禍まぬがれてこそ今あると茶屋の主は金沢を語る

うるしの艶に磨き上げられたる階段を昇りて弁柄群青の粹
霞ヶ池に枝を張り出し見栄切るか唐崎松は千両役者（兼六園）
湿り帯ぶ苔のみどりに光透く新緑もみじの清しきささやき
訪日の客で賑わう駅前通りを支援物資の車輛が過ぎる
復興支援とシール貼られたのどくろめし二十袋を土産にせめて

高橋 説子 栃木

ひたすらにカラスノエンドウ抜く吾の無防備空間に誰も来るなかれ
降りしきる雨に形を崩しゆく牡丹の蕊の黄の際立ちて
半夏生然として群れに紛れ込むドクダミを確と見極めて抜く
さうやつて邪魔にしてゐるその種類はニホンスイセン真つ先に咲く
旅にさへ出れば歌などすらすると浮かぶ筈でける筈だつたのに
押し活に仕事に旅にと弾けゐる娘は吾との旅も企画す

「優雅ね」と吾の刺繍を言ふ人の決して誉めてはをらぬひと言
明け方のベッドより見る消音の画面に大谷選手ばかりが
節つけて和歌を吟ずる坊様のテノール歌手のやうな声量

大塚 亮子 東京

探し物してゐる筆笥の引出しに母の使ひし黄楊の櫛見つく
幼き頃わが見慣れたる黄楊の櫛習字の反故紙に包まれてをり
懐かしく手に取る櫛に齒の欠けたるひとところありいきさつ朧
母の仕草思ひ出しつつ黄楊の櫛使ひ古しの布地に拭きぬ

母の日は牡丹が好きと子に言ひて幾年ならむ今年の牡丹
ベランダの囲ひの高さに助けられ濯ぎ物干す下見るはなく
十階の高さに未だ馴染めずに雲の行方を追ふこと多し
風吹きて子犬の形の雲生まれ間なく消え去り次を待ちをり

メダカ

嶋田正之 埼玉

道をゆく人を引き留め蜜蜂を誘ひ満開庭の石楠花
裏道の古アパートの窓下に蒲公英數十かたまりて咲く
蒲公英の花に舞ひ降り蜜を吸ひ羽震はする蝶の悦楽
水瓶を庭に据え置き飼ふメダカ理髪店主に貰ふ数匹
甕に水はり二日ほどの時を置くカルキを飛ばす段取りとして
布袋草を買ひ求めきて浮かせれば数日の間に増殖はじむ
耳かきに半分程の餌を与ふメダカ喜び水面に騒ぐ
この夏の暑さを如何に乗り切るか小さな命見守りゆかな
公園の白詰草のシジミ蝶ベンチに見詰め今日を生きてる

江波戸愛 子☆ 埼玉

金柑の実の食べ方は鳥の種によりて違ふと夫言いたり
芍薬の固き苔の茎のびる伸びる間に苔は緩む
芍薬の窓の高さに伸び来たり苔ゆるみて花の色みす
母の日に貰いたる紫陽花ねんねんに大きくなりて存在示す
鉄線の盛りすぎたる鉢なかに淡く小さき花のいくつか

この花の匂いはいやと言う人を思ひて庭のジャズミンを観る
地の面に貼りつくように生う草のありてひたすらその草を抜く
しばらくの間休みていたりしが夫で行く朝六時半
ひさびさに聞く声たのし体操の帰り賑やかな三人の声

橘 美千代 新潟

道せまく曲がり角多き街を嫌ひ大火後の酒田にならへと思ひき
開けはなしの窓よりオリブの葉を揺らし風吹きこみぬ雨のにほへる
水の面にさみどりの苗並びある田のあひだ抜け道すすみゆく
ゴールデンウィークは田植ゑのまつ盛り緑の羽を田植ゑ機ひろぐ
母息子孫の三世代うちそろひ観世音菩薩に頭を垂るるあり（真言宗乙宝寺）
護摩に焚べ祈願せむとふ木片に願ひをしるし三宝に積む
参道の果てに血の池と図にあるをたづねてゆけば涸れ果ててをり
だれもぬぬ林に積もる葉のうへに時をり音たて雨粒落ちる

ブレイクあずさ☆ カナダ

五月晴れ風は海から吹いてくる岬へ向かうペダル of 軽さ
目覚めたるナクネク河の水塊のぶつかり合えば太き音する
濃密な生と死のあり魚を追うベルーガを追う海鳥の群
流水は水上タクシー二羽三羽カモメらのんびり運ばれてゆく
こんもりと茂るルバーブ明日あたり夫の好きな菓子を焼こうか
ルバーブをまるごと齧るそばかすのひよろりとした子むかしの夫

長電話終えてため息ガザのこと持ち出す人はユダヤの血筋
イスラエルの肩持つ人の揺らぎなき言葉を前に深呼吸する
亡き友の庭に静かに降りて来る夜の深さよ海底のような

稲田 正 康 東京

サブリメントに害あるものの含まるといふ関はりのなきことなれど
休みあたるリハビリのかべ鯉となり変はらぬ猫が笑ひて招く
この年は早く枝切りせる木槿わかき芽を持つ三月なるに
この年の花垂れかかる水のおも鯉が背びれをのぞかせて行く
背びれとは何に役立つ水面に背をあらはしてゆく鯉いくつ
水草にかかれる白きもの見えて上流の花ちり初むるらし
隣り家がけふ引越すといひ来たる歩き初むる子楽しみをるに
引越すといふ隣り家の女の子大きな林檎くれしことなど

町田 勝 男 埼玉

大宮駅やまびこの無指定に妻待てど見えずばひと足先に乗るなり
それが失敗仙台に着き暫し待てども妻は来たらず雪は降るなり
鍵も傘も妻が持つなりバス停の南中山行きに飛び乗る
雪の中大観音前キャリーを曳きやうやう着きたり雪にまみれて
鍵探しいつもの場所に見当たらず奇跡的なりキャリーバッグに
部屋に入り待てど来たらず長男を呼び出し大宮駅を探してもらふ
駅員は探しあぐねて警察に届けよと言ふ息子は言はれるままに

雪女郎か19時過ぎて眠れざるわが枕もと妻は帰り来

姉川 素枝子 福岡

請求書のみ入りてゐる箱の奥なほたしかめて戻るあはれさ
便利さと豊かさ求め止まぬ世を善か悪かと自らに問ふ
孫のこと旅のことなど書きとむる手帳出できて甘し涙の
先師より継ぎて躰を診てくるる医の頭しみじみと見つ
放送の言葉ますます速くなり情報過多のあわづらはし
逆しまになりて回るをダンスといふ眠れぬ吾の昼夜逆転
渡り鳥まてるサシバのごと潜む巡回警備車きづかぬふりす
白き雲しく高良山に向かひゆく背のぼし胸はる助手席にゐて
脈細きを言ひつつ叩く看護師に要をしふ腕の血の管

井上 菅子 山形

家跡の藪の中より白梅はここに居ますと春くれば咲く
三回忌の法要済ます丸二年不在の夫が遠くもならず
芽吹く柳の淡き緑が好きと言ひしその人は亡しました春が来て
逝きて二年の春巡りくるわれは此岸の彼は彼岸の桜見てゐむ
桜咲きなば見むと思ひし高校のグラウンド芽吹すぎて行かれず
連翹は乱れがましく散りてゆくこの家に住む誰か出で来よ
箒目の鮮やかにして春の土わが生日をまた一つ越す
インドジンウソツカナイの三ミリの種が秘めゐる激辛南蛮

若き日の非礼許せよ交はりを残しし者に謝るばかり 赤羽佳年

若い頃を思い出しての後悔の念を詠んでいて心に沁みる歌です。出来るなら忘れてしまいたい事でしょうが、忘れられずにいつまでも心を苦しめるのでしょう。今となつてはただ心の中で謝るしか出来ません。真摯に自分の過去に向き合う姿に感銘を受けました。

藍染の雛人形の壁掛けを飾りて祝ふ我が雛祭り 赤間洋子

語調の整った歌で、作者の優れた美意識を感じました。作者は一人暮らしのようですが、自分自身のやり方でひな祭りを祝っていらしやる様子がよく分かります。この壁掛けには藍染ならではの美しさがあるのでしよう。

吉祥寺阿佐ヶ谷荻窪中野駅なつかしき名よ通学したりき 有泉泰子

若い頃武蔵野市に住んでいたことのある筆者にとつても、これらの駅名は懐かしく感じます。作者は通学で利用していたようで、駅名を並べただけも様々の思ひ出がよみがえってくるのでしよう。

隣家の百坪の土地売られゐて三軒の家のこれから建つと 青木初子

一連の作品で隣の家の解体に至る凄まじいまでの様子が伝わってきます。この歌は最後の歌で、この時点ではもうこの土地は更地になっているのでしようか。新しい家が建てば、隣家に住んでいた女性の痕跡は全て消えてしまひそうです。淡々と歌われていますが、作者のやるせない気持ち伝わってきます。

リメイクの肩掛けカバンは椿柄姉の手により帯地の活きる 黒田江美子

最近では和服を着る機会は少なくなりましたが、和服の素材をリメイクに利用することはよく行われているようです。この歌は肩掛けカバンの椿柄を引き立たせる詠み方が巧みで、見事に仕上がっています。お姉さんのリメイクの技術の巧みさを感じます。

漱石の「こころ」が今こそ沁みくると七十を過ぎて友は言いたり 高松美智子☆
「こころ」は漱石の「三四郎」から始まる二つの三部作の最後の作品で、筆者も何度も読み返しています。本稿で最初に紹介した赤羽さんの歌にも通じる重いテーマを扱っています。この歌の友人にはどんな過去があるのでしようか。

置き忘れの剪定鋏が見つからぬ切れ味の良夫の形見の 高橋説子
うまい歌だと思いました。「の」の字が繰り返される下の句が巧みで、この剪定鋏が大切にしなければならぬものと分かります。それなのにうっかり置いて忘れてしまった自責の念もあるのでしようか。亡きご伴侶に対する様々な思いの交錯を感じさせる作品です。

浅春のひかりのどけき堀際に三度目の播種はうれん草芽吹け 町田勝男
二句目に百人一首にも使われている言葉が使われていて、のどかな雰囲気伝わってくる歌です。既に播いた二回はうまくゆき収穫出来たのでしよう。

過去回想の助動詞「し」の誤用・慣用について

『四斗樽』刊行以前の太田行蔵（最終回）

——『慕何雑詠』を読む——

大山 敏夫

先ず訂正のお詫びから始めたい。本稿(3)の中で取り上げた

⑬ ひややかにあたまあれよと恐らくは神おぼしめしわれ
禿げにけむ

の一首について「し」の用例としたが、この「おぼしめし」はうっかり「おぼしめし」と読み違えたもので原作「おぼしめし」は連用形で「おぼしめして」の意味であった。読者からのご指摘を頂き気がついた次第で、迂闊であった。ご指摘に感謝し、ここに訂正し、⑬番目の用例は削除する。

丹沢に行く子と起きて朝まだき炬燵にわれは万葉を読む

⑳ 悔いなしとまづは申さなこの年もひたすらにせし万葉
のベンコ

㉑ 引きなれし字引のあとにのこることも時には思ふかな
しみの一つ

⑲ はげましてわれに万葉よましめし稲付の丘の「こもよ」
のはたち

赤羽の稲付の丘朝日にも夕日にもわが思ひいづべし
赤羽稲付の丘の万葉集勉強会関連の歌がたくさん並んでいる。同居する子が丹沢登山に行く朝も未明から目覚め万葉の学習を怠らない様子が読み取れる。㉑の中でも「ひたすらにせし」と取り組んだ万葉の「ベンコ」を語る。このベンコが何から来るのか不勉強で分からぬが、「困知勉行」の「勉行」と考えている。「悔いなし」と言い切るほど頑張った満足感はいよい。

㉒ では字引をたくさん引いた様子が解る。そして㉓の、「こもよ」のご婦人方への感謝も手厚い。その方々の存在、その激励によって万葉集をずっと読み続けることが出来たのだ。この三首はすべて自身の体験を言うのであり「○」。

右に取り上げた最後の歌は、一連の「反歌」のようなもので、万葉時代によく見られる用法の対句も入れ、大きく歌いきっている。

㉔ 耳遠きことわり言ひて今言ひてぬしは何かと車掌にたづぬ

包み紙につきたるバターをこそげつつえらくはなれぬ男と思ふ

この頃はたぶん補聴器などの助けを借りていたのだろう。

「うむうむ」なんて言いながら補聴器のマイクを向けられたことを思い出した。聞き逃したのもう一度お願いします、という質問か。車掌が身近に居るといえるのはバスか都電かと思う。この「し」は口語の「た」に近いので「×」が妥当。『四斗樽』に従えば「あたるは何と」とすべき所である。並べてあげた作品に置き換えるなら、「つきしバターをこそげつつ」と言うようなものであろう。

半猪口の酒をふくめばまたすこし氣に張り出でて机にむかふ

いささかの酒にほろほろうらがなし夜になりゆく山々の色

④ つきつめて思ひしこともすでに忘れ厨に更けてひとり酔ひをり

④2 よき酒と母よおぼせやねころがり胸板たたき歌ひつつ居し

様々な場での酒の歌が続く。こころなしか張りのない日常を背景にしている。時には精神的に高揚しアイデアや文学的着想なども膨らむ。だが、それも酒の魔力に負けて酔いに身を任すことになる。④1はそんな感じの「し」で、少し前だが自身の経験なので「○」で良い。④2はかなり盛り上がっている。「おぼせ」は「思す（おぼす）」オモホスの転で「思う」の尊敬語。胸板を叩き歌うのは作者である。太田行蔵の作品には

連体形「し」を終止形的に使う例がかなり目立つ。

④3 周公をこのごろ夢に見ざりとて孔子目覚めに歎きしといふ

④4 夢さめてその悲しきに思ひ寝しうつつのそれはなぐさまむとす

④5 手のひらに竹くぎ打たる夢見たり頭をのせて眠りたりしに

④6 ひきがへる殺す仕事をやらぬかと就職の世話きたる夢見し

夜に見る夢の歌が纏められている。④3は、老いて衰えた孔子が既に周公の夢を見ることが無くなったと嘆いたことと、自身の老境を重ねている。④4は自分の見た悲しい夢であろう。④5は悪夢と言うべきものか。手のひらに打たれる「竹くぎ」とは何の喩であろうか。竹釘は昔の建築物の中で、板葺き屋根の施工時に使われたようである。見た目の美しさや錆の防止効果があったのかと思う。それを掌に打ち付けられた夢を見た。手足に釘を打たれ十字架にのせられたイエス・キリストを思っていたのだろうか。太田行蔵の葬儀はキリスト教によって行われたのを思い出した。

そして『慕何雑詠』最後の「し」の用例である④6、夢だからその仕事の詳細はおぼろだが、何か飄々として現実に有りそうで無さそうな仕事だと思う。ここの「し」はすべて「○」だ。

以上で歌集『慕何雑詠』に見られる「し」の使用例は終わ

りである。総数は45首だが、手書きの一首《文学をつひのなぐさと 念じつゝ 一生終へしと わが墓に刻め》を加えれば46首となる。そのうち、これは間違いであろうという作品が三首あり、×か、もしくは△であろうと思われるものも二、三首あった。

印象ではほぼ問題なさそうな作品ばかりと思う。ただ、それは大山の妥協案としての、作者の体験、行為を言う時は仮に「ついさっき的なことでも良い」に基づくからであって、『四斗樽』の主張を厳格に当て嵌めると「×」が付される歌も幾つか増えるだろう。正直に言うと、この「し」の問題はなかなか難しく、細部は人によって多少違う判断がなされる傾向がある。要は「どっちでも良い」ではなくて、過去回想の助動詞だと言うことに拘ろうという提案なのである。

最後に、昭和五年刊行の太田行蔵著『登山』の中には末尾に「愛誦する山の歌」のタイトルで68首を挙げている。その中に「し」を使った作品が四首あって、

① 岩攀ちて登り來し路見おろせばこの在る私の消ゆらくみ山に 窪田空穂

② まがなしきものをぞ見つる繁山のこの山かげに人ふたり居し 土田耕平

③ タぐれて天雲四方にしづまりし嶽のいただきを寂しと思ふ 齋藤茂吉

④ 常はただ遠しと思ひし深山嶺の白雲のなかに吾は來にけり 藤澤古實

の通りだが、①と④は自身の体験なので「○」、②と③は目の前の状態なので「×」という判断になろう。

さらに同六年刊の『憧れのキャンピング』の巻末に挙げられている『山家集』からの27首を見ると、「し」の用例が三首あって、

① よしの山梢の花を見し日より 心は身にもそはずなりにき

② 花すすき 心あてにぞ わけて行く ほの見し道のあとしなれば

③ わりなしや 氷る笕の水故に 思ひすててし 春の待たる

こちらは皆自身の過去の回想が軸となっていて「○」と言うべき作品例となる。という結果、この二冊の著書にとりあげた作品数のわりに使用例は少ない感じたが、昭和には「×」がちらほらあっても西行の時代になるとほぼ無いという状況が見える。

これをもって『四斗樽』以前の太田行蔵の作品からの過去の助動詞考を終る。お付き合い頂き感謝申し上げます。

作品一

桜井 美保子 神奈川

源泉の掛け流し湯に血管の浮き立つ手の甲つるつるとして
ダイニングの窓に伊豆の山見えて茜おびたる雲かかりをり
自家製といふ蜜柑ジュース食卓に運ばる老年の胃に具合よし
フレンチの料理に使はるる茄子豌豆無農薬野菜のほかに甘し
日常の明るき照明に慣るる目につくづく暗し宿の灯りは
伊東市の名前の由来聞きながら狭き通りを駅まで送らる
女学生三人坐り賑やかに話せり海辺を走る電車に
斜めがけのバッグと小さきリュックにて東海道線軽やかに乗る
火にかけた鍋焼きうどん湯気ふきぬ数独パズルに時かけてゐて
五葉湖に桜の浮橋つくられて棲みゐる鴨の橋を突つ切る
田畑を潤す慈雨には多すぎる天からの貰ひ水列島襲ふ
断崖をうねる高波迫り上る台風ちかづく壊すな街を
先導する祭りの白馬は糞おとし大衆の前晴れやかに発つ
箸一膳そろへて独りの飯を食む春色の街出かけたくなる

田端 五百子 岩手

庭に咲くミモザの色の上着着て今日の会議の扉開けたり

野村 灑子 千葉

冷蔵庫の清掃兼ねて週末に残れる総菜を切りて飯たく
大木を支ふる根本子や孫の如き小さな枝のまつはる
右手萎えて左手に箸を持つ友の茶碗にいつぱい飯のつきゐて
金細工のものはなきかと玄関に坐りて若きは帰らうとせず
玄関のたたきに坐り「出す迄は帰りません」と開きなほりぬ
訪ひ来たる民生委員が「あやしい」と目くばせし追ひ返しくるる
しみ二つ洗へど消えぬセーターの胸に紫の花を刺繍す

正田 フミエ☆ 栃木

育苗のトマトと茄子の成長を朝夕見ればわれ伸びらかに
里芋を植えつけんとして本を見る元肥と畝幅今年の工夫に
春の日の畑に来りて白菜のつぼみ摘むなり籠いつぱいに
春の風に浮かれ草引き足痛め湿布をはりて早く寝につく
えんどうを朝に収穫ひと塩に茹でれば旨し朝の一品
植木鉢に種まき培養土入れたればバジルの種まく自家採種なり
自家採種のバジル種まき発芽まで十日余りに緑の丸い芽

飯塚 澄子 東京

紫木蓮花を楽しむ弥生経て若葉茂れる卯月と変異
天国の主に聞いた花の名よ思ひ出せねど紫の小花

庭中に立ちたけれども膝痛の部屋から眺む初夏の花々
 塀際に赤茶系の花目に入りぬアイリスの花風情格別
 下り立てぬ庭先なれど近付きてカメラに納む卯月のひと時
 年一度の役員総会蒲田にて詩吟の会にタクシー往復
 記録部を二十余年と継続し幹事四人の新人迎へる

斉 藤 トミ子☆ 栃木

冬枯れの山路を来れば早春の光集めて春蘭の花
 金蘭とスマホに知りぬ山路来て我が足元に咲く黄の色の花
 今までの倍程かけて歩みおり病みたる後の初の山道
 富士山を三轟山から眺めおり澄みたる空に両手を上げる
 突然にエメラルド色の鳥が飛ぶ鯉がいるかと覗く川面に
 背を丸め散歩の翁気になれど我れは背筋を伸ばし歩まむ
 倒れてより直ぐに逝ったと通夜に来て友の最後を聞かされている

高 橋 燿 子☆ 埼玉

福島へ花めぐりの旅に行く吾に代わり娘と夫の旅
 滝桜の見事さを送りくる賑わいの中父娘の写メール
 ツアー終え兄と合流の知らせ福島訛りのざわめきを聞く
 三世代の無駄ない暮らし見聞きして五十路の娘は感銘したと
 庭に咲く花桃見事と枝を持ち兄と夫の記念撮影
 ママドール温泉卵の土産持ち頼り頼られ二人が戻る

花桃を生けて夫娘の話し聞く篤いもてなし生家の状況
 「桃が穫れたら送るから」楽しみを次につげる義兄の優しさ

浜 田 はるみ☆ 埼玉

模写とは思いの外に難しくまったく同じに描くだけなのに
 人物は特に動きが難しく真似て描いても取れぬバランス
 初めての水面なんて不安なり失敗覚悟で描き始めた
 画友の絵各々違って参考になりても自分の絵から抜けられぬ
 先生のアドバイス受け加筆すると完成した絵は引き締められぬ
 絵画紙によりて発色異りて仕上がり考え彩色迷いぬ
 良く視て描いたつもりが未だ未だと完成した絵を見てから気付く

野 崎 礼 子☆ 埼玉

海岸線孫を追いかけてツーリング潮風の匂い肌に感じる
 久高島ゆっくり流れる島時間心ゆくまで海を眺める
 海ぶどうかめーかめーと島のじいその温かさに美味さ倍增
 欲しいもの健康かなと笑う夫いつもと変わらぬ誕生日
 朝六時お腹が空いて目が覚める我が健康のバロメーター
 母の味思い出して作るお饅頭素朴な味が忘れられぬ
 床に入り今日一日ありがとうそんな気持ちで眠りに就きぬ

飯 嶋 久 子☆ 茨城

田に水が張られるやいなや一斉に蛙の合唱波の如し

岩手では蛙は「ビッケ」というのよと告げくれし友の消息絶えて
連休を待ちかね始まる田植なり八条の苗一揮に並ぶ

農村に田植休みという日ありき弁当茶など田に運びしよ

ネモフィラに向う車の渋滞すさまじ窓をあけて緑の気を吸う

夫と私の誕生月なる皐月なり待ちかね居るかと風に向いて

シネコンに「鬼平犯科帳」上映のチラシのありて行かむと決める

着流しの鬼平歩みし街なるか麻布市兵衛町吾も住みし

岩 渕 綾 子 岩手

デイクアの騒音邪魔して悲しかり補聴器付くるに二度三度聞く

四時二十四分強き地震に目覚めたりニューヨークの義孫は安否問ひくる

しだれ桜蹇の吾に贈物目の前にあり豪華な花見

たて続けにアパートの人湯殿の死寒暖の差に気を引き締めむ

お花見に招かれゆけば桜湯が息子の門出を思ひ出したり

理事長さんつたなき吾の短歌短冊にして部屋に飾りき

老いし吾たのしき思ひ出あまたありその人柄に親しみおぼゆ

樗 木 紀 子 ☆ 東京

四つ目通りマンションが建ち両側の歩道に並ぶ躑躅満開

町内の通り両側に続く躑躅満開の花見つつ帰宅す

京に居る娘から母の日に送られてきたる立派な座椅子受け取る

別居する長男から母の日に届きたり大きな鉢のカーネーションの花

同居する次男は中華のご馳走と一緒に食べようと食卓に並ぶ

田 中 祐 子 ☆ 埼玉

冬枯れの庭の楓に黄緑の小花が咲けり四月なかばを

庭草の目立ちて屈む小半日に忘れて居たる腰痛の気配

起き掛けの踏み出す一步の向きを変え痛みに堪えてそろりと動く

標高は低く御座すもわがさとの筑波の雄姿テレビに見入る（日本の百名山）

小学校高学年の遠足は徒歩に筑波山の頂上めざしき

風返し峠あたりに遠足の弁当食べき沢水汲みて

弁慶の七戻りなる伝説の大岩潜りき筑波山道

倉 浪 ゆ み 埼玉

我のこと「さくらのやまひ」と言ひし叔母偲びつつ仰ぐ堤のさくら

弟が入居せし施設の庭口に古木のサクラ一本ありて

菜の花にタンポポミモザもくかうばら黄の花咲きみち春はたけゆく

いまだ卯月藤にスズラン花木つゆ草咲きて早まる花時

葉ざくらがつづく川路の散歩みち道辺の草は浅みどりなり

町をあるく数多の人はマスクなしはつきり聞ゆる外つ国の言葉

園庭をゆつたり泳ぐ鯉のぼり我も大空泳いでみたし

林 美智子 ☆ 東京

大柳経費削減のあおり受け電信柱のごとく刈られる

まだ青き枇杷の実日毎ふくらみて五月の風が心地良き晴れ

茄子・トマト・ピーマン植えて雨降れば窓より眺むこれも幸せ
雨の中急ぎ踏み出せば何年振り玄関脇に長き生き物

地表から身を乗り出して玉葱が食べよ食べよと誘ってくれる

石 本 啓 子 ☆ 東京

隣から家庭菜園の土の付く枝豆絹莢隠元など受く

週末は親子三人車で出掛く何処へ行くかは知らずに居りぬ

路地で会う隣の長女男性と二人にて婚の予感はある

電話すればあら叔母さんと古稀の姪互いの息災に安堵するなり

長 尾 弘 子 ☆ 東京

夜嵐は辛夷の花を吹き落とし明方の道白く染めおり

こびりつく花を剥がすはしんどいと朝々道を掃く人の言う

くるくると花を落とすは目白ならん桜の枝を渡るを見上ぐ

七度目の辰年となる友三人龍祀りたる神社を訪ねる

ロボットの茶を受け取れば背を向けてテール避けつつ帰り行きたり

ふんわりとなんじゃもんじゃの白き花咲きていつもの道はあかるし

矢 野 操 ☆ 香川

ほめ言葉くれた人には緊張を言葉にそむくふる舞できず

外出の必需品まずメガネ置き場所例外つくらず守る

本好きの好きな名前は「しおり」だがペンネームにも使う折なき

ボトル水三本持ち来いもうとの心の中の仏性おがむ

水道の蛇口をひねり水が出るありがたさに慣れ感謝を忘れ

松 中 賀 代 ☆ 高知

水張田に早も住みつき夜半までゲロゲロケロの楽が始まる

アマリス幾つ咲くやと数え見る黒の揚羽が静かに止まる

幼子の誕生日なり取り敢えず一升餅を背負わす準備

歩けない一歳の子はうんうんとお餅を背負う大人は拍手

長雨に久しぶりなる月の影雲間に丸く十五夜の月

馬鈴薯の葉を食いつくす天道虫朝夕捕るに成果上がらず

朝早く頭の上を飛ぶカラス姉逝きてより胸騒ぎせず

本 郷 歌 子 ☆ 栃木

応援メッセージ数多書かれてあるバスはひとときわ目立つチームカラーの黄

バスケットチームの遠征の飛行機に乗り合わせるワクワクの時

応援に疲れたけれどバスケットの勝利噛み締め夜空を仰ぐ

喉飴をジュースに作れば応援に声涸らす私の妙薬となる

これが私と主張するがに色違い数多の木々は山を彩る

集落のあちこちに柿の木はありて艶めく若葉繁りたる五月

あなたの目に映っているのはどんな顔私は笑っているかしら

村 上 美 江 岩手

一枚に顔の大きく十一人集合写真の新年生

摩り終へしマッチの燃え滓棄て広ぐ三・二の日付の新聞

セルフレジ混み合ふレジを避け並ぶ「忘れものなし」指さし確かむ
三枚の半紙に友は十五首も所狭しと歌集の感想
ルーティンの有る様で無し吾がかうべ忘れることの増えて落ち込む
釣り銭のきれいな顔の一葉を悔みの為に取り置くが悲し
なにもかも忘れる義母は問ひ掛けに良い様に答ふ良きかな良きかな

伊 澤 直 子 ☆ 東京

蕾紅き「一葉」八重の桜なり開くにつれて色薄れゆく（新宿御苑）

桜色広がる中にうこん色ひと色ちがう桜に人寄る

目黒川ほとりの目黒区美術館娘の知人の写真展に行く

何げない写真をテーマでまとめれば語りかけくる力を持ちたり

公園に並びて咲けるうこん桜数日たてば芯は紅色

春嵐ものともせずにモンシロチョウ二頭ひらひらわが近く飛ぶ

花のあと公園の木木は輝きて池にこいのぼり十七本渡る

乾 義 江 ☆ 茨城

朝日影経路変わりて我が閨に流るる如く時の過ぎゆく

築山に日差しを浴びてこんもりと紫木蓮形を整う

枝一面淡黄色の花咲かせ風に揺られて土佐水木立つ

運転中気づかなかった自転車道が一番貧しきを知る

蒲公英の白くて丸くて愛らしい冠毛静かに風に吹かるる

華やかに枝垂れ咲きたる庭隅の小手毬にしばし小糠雨降る

主人の姪祈りむなしく旅立ちぬ年に後先無きは辛しも

永 光 徳 子 ☆ 東京

茶畑に一番茶摘む人の群れ竹籠背負う姿懐かし

菖蒲園今が盛りの花菖蒲端午の花の風格ありぬ

連休に娘夫婦と温泉にかけ流しの湯は正に極楽

三人で囲む食事の豪華さに目を見張りつつ会話は弾む

高速の渋滞させて車走るコロナ禍の時期遙かとなりぬ

稲 津 孝 子 福岡

生きてゐる内に伐らむと夫いひてをりにし花の下にきたりぬ

手に入るること叶はざりし先生の八十有八年開く膝の上

春の休みの娘の誘ひ断はりぬ子にも言はない理由のありて

柿の枝の中の紋付鳴きながら小刻みに尾を振るはせてをり

長き茎の先に石路いつまでも絮を保ちて汚くなりぬ

雨の多く寒き日続きフリージアの蕾の立ちて父の忌近し

羽を広げて揚羽の蝶が土のうへに動かずにをり死にたるふりして

三十分が一時間になる草取りを頑張つたねと鳥が鳴けり

戸 部 田 とくえ 福岡

新緑のあふるる町の箱根路を子の運転により一日めぐれり

宿の窓あふぐ富士山手を合はすそばの夫も頭を下げてをり

植ゑてのち根付くトマトに花の咲く余りの早さに増せる喜び

いつの間に玉葱らしく育ちめて思はず一言つぶやく感謝

玉葱の収穫しつつ喜びと遠くに学びゐる子に送らむ
 普茶料理すべて山菜素材の「菜单」を友と味はふ小城町に来て
 咲きはじむるカラーの白妙唐突に思へてならぬその清々しさ

大塚 照 美 兵庫

歌の共演よろこびてゐし友逝きて再会されたか宮城まり子さんに
 男性ふたり日課なるらし聲高なる散歩のすがた何時よりか見ず
 夜ひるのリズムの狂ふこの日ごろ目覚時計ふたつ置く早朝墓参
 支援二の通知のとどく介護認定なかりし時代に逝きき父と母
 不慣れなる杖も電車に乗る気力ありて行きたし動物園に
 雨の日の杖と傘との危ふさも「転ぶまいぞ」と念仏のごと
 向かひ家の朝日に華やぐハナミツキ夕べに映ゆる淡紅の色

吉 村 昌 子 千葉

紋白の出勤時間八時半たがはず飛び来てパンジーめぐる
 寝床より見ゆる空には白き雲ゆるりと動く「おはやう」と言ひ
 揚羽来て窓にその羽すり寄せてテレビ見るわれのぞきて行けり
 わが頭上飛行機の行く音すれど姿は見えず成田の方へ
 赤と黄のチューリップ咲くわが庭に四月来たりぬいつもの様に
 朝夕に血圧はかる夫見てわれも真似して計りてみえり
 庭に咲くパンジーつみ来てテーブルに飾りてくれつ風邪気味のわれに

井 上 楨 子 新潟

川沿ひに枝垂れ桜の多けれど濁れる水に花は映らず
 清清しき五月の風に重なりて咲く八重桜に光とほらず
 裏山の杉の傾りに露の臺やうやく芽ぶきて春の雨は止みたり
 葬儀後に全員コロナに臥しゐると初七日延期の電話受けたり
 紫陽花の今年は一輪も咲かずして深く刈り込む庭師を危ぶむ
 裏山の蜂に刺された若きらが血相変へてわが家に駆け込む
 竹群の筍さぐればほととぎす際立つ声にて一直線に飛びゆく

吉 田 佐好子☆ 茨城

朝晩の気温差があり着るものに頭悩ます四月下旬に
 黄砂とか花粉がつくと二月から快晴なれど外干しできず
 庭にある物干し雨風に耐えており出番が来るまでじっとたたずむ
 つやつやの若葉萌えいる庭の樹々目に良さそうとじっと見つめる
 早いうちモグラたたきの要領でタケノコ狩りの作業始まる
 タケノコの皮むき始めたんと可食部分が見えずいらいら
 タケノコを掘るは易しく皮むきは忍耐力を試される時間

鈴 木 やよい 東京

雨のなか歩いて帰る道もよしアプリが歩数を数へてくれる
 新緑の木洩れ日の下で眺むるはまぶしき光に駆け回る子ら
 お囃子に今か今かと待ちをれば地響きのごとき太鼓の近づく

人も載る大きな太鼓が引かれきて間近の一打が辺りを揺るがす
石仏の揃ひの赤き前垂れは五月の日差しに色褪せてみゆ
節句終はり河原はいつもに戻りたりあまたの鯉は倉庫に眠るや
暗き道に自転車車のライト後ろから近づきて過ぐ鼻唄と共に

中 島 千加子 東京

「精一杯お話聴かせて頂きます」寂しき人に深く礼をす
仕事終へ何者でもなきひととなる吾は強くない三日月見上ぐ
改札を抜けて芍薬ならびる花屋の前で歩みの緩む
愛と夢やさしさつまる芍薬のつぼみとおもふ混雑の駅
ああこれを今年の吾の芍薬としたくて選ぶローズクォーツ色
口紅を二色合はせて創り出さむ思ひやりと愛あふるるくちびる
思ふより淡やかな色が似合ふこと知りて前とは変りゆく吾

山 本 三 男 ☆ 群馬

銀行のいすに腰掛け時を待つ様々な音を聞き分けながら
少年の頃に遊びし花札の楽しさ思う心疲れて
老いたれば目覚めの早し足忍び午前三時の階段下る
胴切りのサボテンに未だ根の見えず一か月水を絶ちたるままで
風邪ひきて苦しくあれば古い目立ち頼りにならぬ妻に苛立つ
風邪ひきてひたすら眠し今は亡きはらからの顔夢に浮かびて
税金のことなど時折り気に掛かる体調わるく昼を臥しいて

熱落ちて身体は楽になりたれど長引く咳に夜を眠れず

特別展「世界遺産大シルクロード展」 中 村 哲 也 宮城

晴れ空に電車乗り継ぎ世界遺産シルクロードの展示観に行く
心染む喜多郎奏でるテーマ曲砂漠にラクダの映像を背に
コロナ禍に久し振るなる博物館国府多賀城駅の隣の
開催後数日のちのそれも午後予想の通り館内は空く
発掘の布に残れる鮮やかな赤青緑の糸の染色
中国で出土の和同開珎に貿易通貨のロマンを思ふ
一円玉程に小さき金貨あり吾なら落とすを恐れて持てぬ
電車待つホーム彼方の薄雲を黄色く染めて陽の沈みゆく

(☆印は新仮名遣い希望者です)

原稿募集

編集室では、会員の皆様から左記
のテーマによる原稿を募ります。

記

●島本赤彦の一首鑑賞

皆様が赤彦作品ならこれを選ぶ
という一首について自由にお書

きください。

●先ず作品一首を二行分でお書き
頂き、その後、

*本文 25字×17行

でお願いします。末尾にお名前
を入れてください。

●締切日は、毎月15日とします。

*尚、掲載について細部はご一
任願います。

●宛先は編集室。

冬雷ホームページのネット歌
会に参加しよう。希望する
二首を選んで、事前に申込
みます。
活発に動いています。
(広報係)

参加希望者は「広報・桜井美保子」
宛に最新号掲載作品から2首を
選んで申し込む。批評を受け、自
身も批評に加わることが出来る。
小誌ホームページにて今までのも
のが閲覧できる。ご活用を。

冬雷ネット歌会

五月号作品一評

小林 芳枝

植木鉢にビオラ種まき苗作り鉢上げで
きず花が咲き出す 正田フミエ☆
種は蒔いたが植替え出来ないうちに花
が咲き出してしまった。粋めきながら咲
いている花に詫びたい気持ちであろう。忙
しい日々の暮しも感じられる。

何処までも徘徊できるとリハビリ師足
の筋肉称えくれたり 斉藤トミ子☆
急に体調を崩されたが登山で鍛えた体
力で回復に向かっている。リハビリ師の
ユーモア溢れる励ましの言葉が楽しい。

一面に咲くホトケノザ見る友が杖をた
よりに身をかめたり 高橋燿子☆
丈は低いが段になって紫色の小さな花
を輪のように咲かせる可愛い花である。
近付いてよく見ようとすると友の様子を見
守る目がやさしい。

何たること転んで頭にたんこぶ三つ救
急車にて搬送さる 飯嶋久子☆
転んでしまった自分に驚きあきれたよ

五月号作品一評

藤田 夏見

ぽんぽんとキャッチボールの会話せり
駅のホームに見知らぬ人と 桜井美保子

駅のホームに電車を待つひととき何か
のきっかけで会話が弾んだ。ぽんぽんと
キャッチボールのように続いた。一期一
会。

募金箱に少しの心寄せし午後輪島の箸
でうどんすくひぬ 田端五百子
前の歌にあった小さな支援の心で求め
た輪島塗の箸なのだろうか。元日の惨事
に心を寄せている作者。温かく美味しい
うどんだったのでしょね。

何処までも徘徊できるとリハビリ師足
の筋肉称えくれたり 斉藤トミ子☆
長い入院生活も快方に向かわれてい
る。元々働きの筋肉はしっかりとあり
リハビリの指導者からは冗談めかして
何処までも徘徊できるなんてユーモア溢
れる受け答えを詠まれた。

うな初句から始まる一首、読者としては
たんこぶがどうして三つも出来たのか心
配になるところだが冷静に纏められた。
二日後に肋骨骨折が見つかったという歌
もあり転ぶことの怖さを思わせる。お大
事にして下さい。

台に乗り蛍光灯を取り替えぬ八十六歳
なんのこれしき 糸賀浩子☆
蛍光灯を替えるのは部屋の真中に立た
なければならぬ危ない作業であるが一
人暮しでは仕方ないところか。結句に
がんばろうという強い思いが籠る。

伸びた枝太枝小枝古い枝切り詰めてま
つ新しい芽を 松中賀代☆
上句に剪定する枝の様子をテンポよく
並べて明るい感じがする。未来への希望
をつなぐような結句も清々しい。

粉こねて母の作りしドーナツの生地は
耳朵の固さと言ひみき 稲津孝子
私の母も同じような事を言っていたが
どうもよく分からない譬えだと感じてい
たものだ。ドーナツも時々作ってくれた
事を思い出して懐かしい。

風に乗るシャボン玉を追う子等が飛ん
だり跳ねたり両手が躍る 高橋燿子☆
風に乗るシャボン玉を追いかける子供
達。飛んだり跳ねたりするたびに両手は
躍るように見える。その手の動きを捉え
た明るい歌です。

子の家に移り住みゆくは易けれど置い
てきぼりの先祖の墓所 糸賀浩子☆
生活の基盤を変える覚悟はもうつけら
れているのだろう。とは言え先祖を尊ぶ
思いに心は揺さぶられている。歌を詠む
事で慰められる作者の心が伝わります。
ぢぎう様うめの花びら身につけて笑顔
で座します木もれ日の下 倉浪ゆみ
いつの日もそこにおられる地蔵様なの
だろう。うめの花びらがおもいがけなく
その体に散りおかれている笑顔の地蔵様
に作者の微笑みが見えます。

千筋菜その名にまさる大株を隣と分け
あふ工夫の献立 戸部田とくえ
千筋菜の株は見事に大きく育ったのだ
ろう（千筋菜は初に聞きました）。水菜
を隣と分け合いおしゃべりしながら献立

夜の更くる濠の冷たき水に浮く鴨は動
かずひとかたまりに 大塚照美
鴨は秋に北方から渡来して日本で冬を
越し春には帰る。日中はそれぞれ活動し
ているが夜はかたまって眠るのだろう。
群れで眠る姿に感じるものがある。

雛あられ買ひ来て雛に一袋われ一袋ま
づは味見を 吉村昌子
雛あられは毎年買っていたが味見をし
たことはなかった。後で食べるより味見
で食べる方が美味しそうで楽しい。

夫の香と同じ男とすれ違ひ忘れをりた
る整髪料買ふ 井上楨子
偶然すれ違った男性の香りから夫の整
髪料を買うことに気付くことができるの
はなんて幸せなことだろう、帰った時の
夫君の喜ぶ顔が浮かんでくる。

ちから込めツノ立つほどに泡立てて顔
を洗へば少し気の晴る 鈴木やよい
気分転換の方法のひとつか。たつぷり
の泡で洗ったらさっぱりして胸の中の蟬
りも一瞬消えるかもしれない。

の情報交換も、まずは鍋料理の夕食か。
大寒の交差点なる若き僧まなこを閉ぢ
て胆力の聲 大塚照美

寒行中であろうか。交差点で信号待ち
をする間も若い僧侶は腹からの題目を唱
えている。四、五句「まなこを閉じて胆
力の聲」、朗々とした声の若い僧の存在
感に圧倒されている作者でしょうか。

お楽しみ会にて舞台上に「雪国の春」を
歌へり天井を見て 吉村昌子

お楽しみ会のカラオケで順番がまわっ
て来たのだろう。恥じらい緊張しながら
天井をみて歌う作者の様子が見えるよう
です。わたしも指名されると同じように
固まって歌うので、共感を覚えました。
この仕事せねば後悔するだらう困難女
性支援相談員 中島千加子

ジェンダーが取り沙汰されている社会
はやはり女性や弱者が生きにくいので
す。作者は何かの思いを持って「困難女
性支援相談員」と向き合っていくことを
決意されている。後悔をしないとの思い
に応援をしたいと思います。

七月集

本間 志津子 山形

花曇りクルーズの客上陸し一日賑はふわが住む街は
クルーズの客をめあてに出店あり俄か仕込みの和のものを売る
公園の桜並木は雲のごと空に向ひて溢るるばかり
風にのり桜花びらまろび来る葉先の見ゆる木木の先より
大リーグ五輪の予選プロ野球若さが走る夏への道を
桃の花枝の先まで密に咲く畑地どこまで桜のあとを
試みに山菜の残り鍋に入れほろ苦き春の味を楽しむ
両側に芝桜濃き道歩む観閲式の挙手するやうに
連休の昼下りの街静かなり淡きみどりの木木の芽吹きに

益坂 順子 福岡

雷か採掘音が薄暗き樹林の中に不気味な響き
二万歩を越ゆる登山の癒さるる沢のせせらぎ鳥の囀り
「努根性」の名札付きたるブナの木の花を抱きて根を張りてをり
落ち葉つむ登山の道の盛り上がり集まりて立つ銀竜草の
数本の小枝の囲むその中に銀竜草の守られてをり

お茶と菓子こめ一キロの参加賞はるのひと日のファミリーウォーク
友の子の「家が来る」とぞ言ひてをり組立てらるる積水ハウス
クロバーの四つ葉を探す朝明けに思ひ出したる旅先のひと
旅先のアイヌ文化博物館前の広場の四つ葉を想ふ

須藤 紀子 埼玉

ホーホーと鼻の声二度三度応ふる声のなき春の宵
四国遍路行くとふ人が甕に飼ふメダカすくすく育ちてをりぬ
庭に生ふる藤袴の苗分けくるるアサギマダラの寄りくる花と
眠りつつ足震はせる老犬は夢見てゐるか遊びし時を
遠くまで歩かむとして腰崩れ途方に暮れる犬を愛しむ

松居 光子 三重

ていねいに一針一針手で縫ひたる巾着袋を友より賜びぬ
雅印を入れてみたれば丁度よしぬくもりのある手造りの袋
花粉症もコロナウイルスも遠のきてマスクをはづし外出をする
穏やかな陽ざしと心地よい風に満喫すなりみどりの日けふは
フレイルを意識するわれ再びをスポーツクラブに入会したり
四年振りにプールに入り水圧を強く感じつつウォーキングす
これ以上足腰の衰へ進まぬやう水中歩行を励みてゆかむ

川上 美智子☆ 高知

絶景の入り江を臨むテラス席に少し優雅なランチを友と

入り江には養殖筏並びいて時折り小舟の行き来の見ゆる
養殖の鯛とかんぱち高級魚なりランチの膳に初鰹のたたき
カーナビを頼りはるばる行きたるに忘れ物せりランチの店に
白蝶は今日もふらりと我が庭に誰の化身か足元に寄る
掴まんと揺れる葉先に縋る蝶羽ばたきながらにバランス保つ
一瞬に頭をよぎる南海大地震激しく揺るる恐怖の数秒
大地震と思いたる恐怖収まらず風の音にはっと身構える

大野 茜 神奈川

原つばにサッカーボールを一人蹴る少年ちらつと我に視線を
八寸にレモンの苗木育ちゐて初生り四つ冬の陽の中
自治会館改築に向け委員会の一翼但ふ重荷を覚悟
気温三度暖房の無き体育館凍える身体でステップを踏む
きぬさやの紫の花一つ咲く北風に凜と気品漂ふ
安置室の亡夫の顔をじつと見て口元変ねと義姉のつぶやく
五年経ち五十を超ゆる実りあり甘夏の一個挽ぎて両手に
僅かなる二センチ程の雪降れば車も通らぬ都会の弱さ

佐藤 幸子 山形

種まき桜大山桜に江戸彼岸桜みな咲き急ぐけふ二十七度
真ん前に菜の花畑の広がれるセルフスタンドのレーンに入る
光満つる立壺堇の朝の露集め啜らば美味しからうに

一里先の山まで響く鹿の声妻恋ひ呼ばふ明けやらぬ森に
またあすと草引き途中で止めるとき僅か手掛ける明日の最初
わが鋤の先に顔出す青蜥蜴虹色尻尾をくねらせて消ゆ
けふ持てるありたけの力で植ゑ付けたる二十本の茄子苗健やかに育て

小嶋 知 葉☆ 茨城

ボストンに学びたる孫の卒業式娘夫婦の笑顔もありて
全米の各地の大学に広まれる反戦デモに揺れる卒業
ボストンは八度の寒さとラインありキャンパスの前は長蛇の列に（五月二日）
ひさしぶりに電車に乗りて上京す車窓の景色新鮮にして
娘より留守を頼まれ六日間高校生の孫と楽しむ
登校の孫を見送り静かなる上原界限夫と散策す

藤田 夏 見☆ 広島

稲作の八十八度の手間もなく米をいただく日ごと日毎に
わか葉萌ゆ柚子の蕾はみえ隠れ苗代風の冷たき朝
オーブンにマーマレードの焼き菓子をかかせて庭に草取り始む
零れ生うる赤と青色紫蘇の芽の香りたつぷり刺身のつまに
そちこちの若葉を揺らし風の来る枇杷の木陰にひとやすみする
雨つづく竹の林に伸びいたる筍皮を脱ぎ始めたり
はらはらとくるりくると金の葉の舞い散り始む竹に秋来る

「いにしえの北前船の寄る港」と韓国の人と高台に見る（尾道水道）

残響集

松崎 みき子 岩手

岬まで山は荒れ果て道狭く灯台跡は面影もなく
菜の花のやうな明かりが消えかかりトタン屋根打つ淋しい雨音
皐月晴れ牧場でポニーに触れる孫小さき手に餌食べさせてゐる
停泊のイカ釣り船の船長は若き二代目父母をわが知る
山中にほのぼの見ゆる紫は咲きはじめたる桐の花かな
爽やかなハーブミントの香りくるわれの花壇の外れの風に
お下がりの孫のスニーカー履く夫は満足の笑みですたすた歩く

水澤 タカ子 山形

風除室のガラス三面プロの手に磨かれ春の彼岸会を待つ
会館の硝子戸すべてを子は磨く何日もかけバケツ置きつつ
はづしたる網戸は立木にたてかけて放水し洗ひ乾けば戻す
本堂の仏具磨きは幾日か息子ら専念す廊下にこもり
対になる真鍮の瓶に立華松と大菊小菊入りてはなやぐ
墓清め香華を供へ亡き夫に法要つとむと語りかけたり
中日は雪の舞ふ日になりたれど参詣の人ら御堂いつばい

熊本より招かれたる僧うす着にて立ちつばなしの法話は熱し

津田 美知子 岩手

寝入りばな近くに鳴くは狐かと月明かりの庭窓より覗く
指折りて何かかぞへる義母百歳曾孫来る日を待ちわびるらし
初めての長距離ドライブする孫の道案内はカーナビの指示
何処の町走りて来たか孫に問ふカーナビの指示ゆゑ分からぬと言ふ
土の中に厳冬耐へたるチューリップ黒土割りて柔き芽を出す
芽吹かんと硬き木の芽のほころびてムクムクツと青葉出でくる
さみどりの山々暫し眺めぬて何故か遠くへ行きたい気分

後藤 恭介 ☆ 茨城

朝方に淡雪となり積もりそむ午後の会合不安がつ
妻と手帳並べて決める花見時いつ頃何処へ車走らす
アメリカと大阪に住む息子たち自立と思えど奮闘祈る
春の宵仔猫のテレビに見入る妻「可愛いね」と連発飛ばす
久々のカラオケ店は満室なり春休み中の学生達か
ファミレスはタブレットにて注文しロボット運び来てセルフ会計
春うらら妻は友らと東京へ吾はカラオケ楽しむ自由
我が喜寿を長男家族祝いくれ「土佐の料理」を孫たちと食ぶ

五月集／残響集評

ブレイクあずさ

シャトルバス横目に見つつ歩くこと慣れたる友と足早に行く 益坂順子

バスに頼らず自分の脚でしつかりと歩んでゆく作者たち。普段から鍛えている人だから「足早に」。この余裕が痛快。

少しだけ薄着のあした新しくなりたるカーブミラーの透明 内垣米子

思い切って春物をまとった朝。気が付けばカーブミラーも新しくなっている。ミラーに映る風景は明るい陽射しに澄み切っていたのだろう。

バイバイと手を振ることを覚えてる二月の陽射し小さな帽子 藤田英輔☆

孫や幼などを使わない間接的な表現が甘さを抑えていて、なおかつその技巧を感じさせない秀逸な作品。結句がなんと愛おしい。こういう一瞬を幸福と呼ぶのだろう。

田の畔にその身揺らせて鳴く鴉鋭き眼にわれを見ながら 梶尾栄子

鴉の子育ての季節のせいだろうか。鴉は作者を見ているが、作者の鴉に対する観察力も鋭く細かい。「眼」があるので結句の「見ながら」をほかの言葉に置き変えても良いかもしれない。

床に置く段ボール箱かばんなど支障なければ良しとするべし 齋鹿ミヤコ
一連の歌より健康上のトラブルを抱えているご様子がうかがわれる。今は何を置いても体調と付き合うのが精いっぱいなのだ。結句の強い調子はそれを自らに言い聞かせている。

二度三度ありがたうを繰り返し老いを寂しむ車内の我は 松居光子

年年にできないことは増えていく。だから助けてくれる人の親切はありがたい。

ありがたいのだが、その分失われた自分の力を自覚することになって、少し悲しくなってしまう。複雑な思いに共感する。

玄関にてんとう虫を見つけたり動かずじつと我慢競べする 川俣美治子☆

待ちわびていた春。この明るい季節を喜ぶ心は人も虫も同じだ。だからこは

小さな命を優先しよう。そんな気持ちが詠まれている。

春の日は大きな力の栄養素慈雨にも恵まれ新芽健やか 加藤富子☆

こちらの作品も春の喜びをのびやかに詠っている。サブリの成分説明のような「力の栄養素」との表現が楽しい。

しやべりつつ公園にゆきたる園児たち帰りは無言に歩みものろく 野口秀子
結句に遊び疲れた子供らの姿がありありと浮かんで、思わず笑ってしまった。見守るような眼差しがある。

われは趣味を二つもちつつ娘の世話にならぬと決めて心落着く 佐々木政子
「二つ」の具体性が効いている。それは生きがいであり生活の指針でもあるのだ。結句に説得力がある。

ひとまわり背丈の伸びてバタフライのフォームに自信のしぶき上げたり 金子八重子☆

「背丈の伸びて」に力強さがあり、練習の成果を実感している。さわやかな読後感。

■島木赤彦の一首鑑賞 5

隣室に書よむ子らの聲きけば心に沁みて生きたかりけり 島木赤彦『柿蔭集』

推理小説に凝っている時期にある縁で心の奥を抉り出すような短歌に巡り会った。五十一年の短い生涯を短歌に捧げたという赤彦の歌集である。自然な語り口でいながら切実な思いに満ちていて、特に子供に対する揺るぎ無い愛情が痛切に響く一首に魅了されたのである。また晩年の八魂はいづれの空に行くならん我に用なきことを思ひ居り。大正十五年には重篤な病でありながら八信濃路に帰り来てうれしけり黄に透りたる漬菜の色は。など。長野県の名立たる野沢菜であろう。子供の頃の食卓に黄色に透く漬物がいつも乗っていたのを懐かしく思い出した。読み始めるとどの歌も自然で風情があり、ありのままに心に沁み込んで来る。印象的な場面ばかり切り取られていて、個人の感慨であるかも知れないが、まるで短歌であるものの小説みたいなドラマチックさに引かれる。毎日の生活を丹念に慈しみ、短い生涯が満たされた清澄厳肅と世に評されている。「島木赤彦短歌の世界」を、大切に読み継いでいきたいと切に思う。〈井上楨子〉

島木赤彦研究会入会案内

●島木赤彦研究会は昭和45年に設立。支部は昭和49年に長野県支部として設立。

●会長 高橋 克

●島木赤彦研究会は、近代日本文学および、近代教育における島木赤彦の業績の資料保全と、調査研究を目的としています。

●そのための研究活動として、研究大会の開催・資料展示会・東京例会・支部研究会などを行っています。

投稿などの機会が得られます。●(年会費二五〇〇円)

●本部事務局 江戸川大学 高橋 克 研究室内

〒270-0198 千葉県流山市駒木四七四

☎ 〇四(七一二)〇六六一(代表)



五月号作品二評

井上 萱子

四十五年製品作りし工場を首振り倒す
ユンボの一打 佐藤幸子

四十五年生業としてきた工場の解体。夢もあり希望もあり励んできた四十五年の歴史は疎かではない。ユンボの一打を見詰める作者の心の内を想像する。

僅かなる段差の前で躊躇する老いたる犬をそつと押し上ぐ 須藤紀子
「そつと押し上ぐ」に、作者の優しさがある。犬にも自尊心があるだろう。それを傷つけまいという、内なる心遣いが伝わる。上の句に犬の姿が見えるようだ。キンカンがほしいと言つて友が来る生つてる枝を切つてあげるね

早乙女イチ☆
口語の自然体が心地よく、下の句は説明ではなく動作で詠み、作者の声が聞こえるようだ。関係性のよい友が見える。届きたる節重われの手作りと並べて撮りてはじまる新年 鈴木計子

箸を付ける前に、まずスマホで写真を撮る。ケータイが普及する前にはなかったセレモニ―であり、わが家でもする。

鉢植えのハエトリソウは一冬をわがベランダで無事に越したり 卯嶋貴子☆
ハエトリソウは多年草で耐寒性もあるというが、冬はやはり心配。「無事に越したり」に、安堵の気持を述べる。

この桜見せてやりたき者ありぬしみじみ眺む橋の上より 山本述子
人にも見せたいほどの桜は、当然見事な桜であろう。「見せてやりたき者」という表現は謎めいていて魅力的。

また元の筋肉までは望まぬが笹百合の咲く山にゆきたし 藤田夏見☆
多くを望まぬが、せめて笹百合の咲く山に行きたい。慎ましく美しい下の句が情景を彷彿させて、願望よ叶えよ。

豆三升糍多目の塩少な今年の夏を堪へておくれな 小林貞子
手作り味噌の材料を具体的に述べ、塩分控え目は保存が効かない不安を詠んだ下の句。「堪へておくれな」、なんとやさ

しい味噌への呼びかけか。

咲き盛るラッパ水仙今年また向かひに隣に配る楽しさ 江藤ひさ子

球根を消耗させないために、花は早目に切り取るのだろう。見て楽し、喜ばれて嬉し、春の喜びに溢れ、水仙ぞよき花。年明けて畑に行けば大根もかぶも遅まきなれど育ちおり 児玉孝子☆

雪の降らない地域では、冬でも野菜の育つ様子が詠まれている。下の句では大根やかぶに對する愛しみが感じられる。晴天の日の続きいてベッドより時折り庭へ視線を移す 豊田伸一☆

介護タクシーを使う歌もあり、不自由な身体をベッドや車椅子で過ごされているのか。限られたベッドからの視野を、晴れた日は庭を見る心の動きを詠む。

眼・耳・歯と年々故障が多くなり頼みの足も千鳥のよう 安川敏子☆
加齢による故障は眼耳鼻だけで、足は達者だったのにそれも頼みにはならなくなった。千鳥のようだという比喻の表す不安定感が、言い差しで止めて効果的。

五月号作品二評

江波戸愛子

土砂均すパワ―ショベルは高校を商業施設に変へゆかむとす 本間志津子
パワ―ショベルは校舎を壊した後を均しているのだろう、この歌に少子化に対する作者の思いがよく判る。昨年避難訓練で子や孫を通つた中学校へ行き、空き教室の多さに驚いたことがある。

デイサーピスにて呼ばれるわが名「ミチさん」も耳に馴染みて笑顔に帰宅す

東 ミチ

家の内外で下の名に呼ばれることは少ないが作者の通うデイサーピスでは名で呼んでいるという。その呼び方に慣れて職員さんたちと親しんで楽しく通っている作者の笑顔が見えるようだ。

走りゆくバイクの音の軽やかに雪国二月の雪なき景色 佐藤幸子

作者の住む山形県は豪雪地帯と聞くと、下の句に二月に雪のない暮らしやすさを詠み、また地球の温暖化を憂う。

僅かなる段差の前で躊躇する老いたる犬をそつと押し上ぐ 須藤紀子

若い頃は段差など平気だったが年を重ねるごとに大変になるのは人も犬も同じ。下の句に老犬をいたわりそつと押し上げている作者とその犬の姿がうかぶ。以前一緒に暮らしていた犬を想いだした。

早朝のテレビ体操続けをり今日もお陰で心身軽し 山本述子
テレビの体操を毎日続けることが大切だとこの歌は教えている。下の句にその成果を詠んで。

豆三升糍多目の塩少な今年の夏を堪へておくれな 小林貞子
豆は大豆で味噌造りを詠んでいる。塩分を控えた少し甘めの味噌なのであろうか、塩を控えた材料なので夏を堪えてと祈るような作者の気持ちが伝わる。筆者も塩分控えめのだ豆味噌を作っているの

で共感を覚える。
控え目な愚痴を受け止め聴きおれば何時しか友も小さく笑う 川上美智子☆
愚痴を黙って聴いてくれる友がいるの

はとても幸せなことと思う。友にとつて作者はそういう存在なのだろう。時には逆になる事もあるのかもしれない。

年明けて畑に行けば大根もかぶも遅まきなれど育ちおり 児玉孝子☆
遅くにまいた大根とかぶを心配しながら見に行ったら元気に育っている喜びを詠んでほつとした気持ちが伝わる。

朝の障子にちよこまか映る影ありてじつと見ていて驚と知る 豊田伸一☆
東向きの窓だろうか、枝か何かの上を動いている姿の障子に映る鳥を見ていて驚と知ったときの喜びを詠んでいる。筆者も同じ経験があり驚ではなかったけれど障子から目が離せなかった。

風もなく早咲き桜満開で双子のベビーカーゆつくり進む 安川敏子☆
満開の早咲き桜を見上げながらゆつくりと歩いている若いご夫婦が、双子の乗るベビーカーを押しながら楽しそうに話をしているすがたが浮かんでくる。ベ

ビーカーを押すひとを言っていないの、もしかしたら祖父母かもしれない。

五月号作品三評

桜井美保子

ソーラン節踊る祭りの懐かしき長い髪
結ひしわれは海の子 松崎みき子
久しぶりの祭りなのだろうか。心が浮
き立つソーラン節に海に親しんで育った
少女の頃を思い出している。過去を述べ
る下句の言葉が伸びやかで美しい。

百までを生きむ夢にて野を行けば林檎
の芽吹きわれを励ます 水澤タカ子
人生百年時代といわれている。その希
望を心に歩いて行く。林檎の芽吹きを見
れば新たな力が湧いてくる。

春雪の湿りて重き雪かきの筋肉痛は三
日後に出る 津田美知子

真冬の雪よりも春の雪の方が湿り気が
あって重たいとは知らなかった。雪かき
は重労働だ。「三日後に出る」という具
体的表現に納得させられる。

目を細め自転車漕ぐ女学生小雪舞う
朝すれ違いたり 高藤朱美☆
自転車で通学する女学生の顔にも細か

い雪が降りかかる。彼女は見通しが悪く
なった雪道を走るのに自然に目を細めて
ペダルを漕いでいるのだろう。すれ違い
ざまの作者の視線が温かい。

墓を参り周囲の草を抜きながら母の好
みし蒲公英残す 井出裕子

墓参りに来て墓の周りに繁った草を抜
いて綺麗にする。その折、母が好きだっ
た蒲公英は抜かずに置く。母への懐かし
さが心に満ちている。

同窓会の知らせ送れば返信に余命三ヶ
月と短く戻る 山崎 猛☆

この予想もしない返信には衝撃を受け
たことだろう。短い返信が人生の無常を
知らせてくる。

ナワリヌイ氏の勇氣ある妻ユリアさん
真実を胸に闘い続ける 笠岡文子☆

プーチン政権の反体制指導者ナワリヌ
イ氏が獄死。氏の意思を継ぎ妻は政権反
対の活動を続けている。報道されたその
姿に作者は心を打たれた。

鳥一羽さえも見かけぬ冬の田につくば
風の渦巻きており 塚本節子☆

寒々とした冬の田んぼが広がる里山。
鳥の影も見えず、つくば風が吹き荒ぶ。
「渦巻きており」にその様子がよく出て
いる。気候の厳しさは人間の暮らしにも
影響を与えているだろう。

春野菜大根・小松菜共に播きトンネル
外すタイミング待つ 越澤太郎☆

一つ一つの農作業を丁寧に行う作者。
収穫まで様々な工程があり何かと大変だ
と思うが、歌には明るく楽しげな様子が
感じられる。

こんなにも予定を入れる嬉しさを囁み
締めながら手帳を開く 首藤文江☆

一連の作品には体が回復して遠出した
歌もある。体調が良くなりいろいろ外出
の予定に入れられるようになったのだろ
う。その喜びが素直に詠まれている。

低空を飛ぶ飛行機の圧迫感グンとせま
りくる鉄のかたまり 永井亨子☆

比較的到低いところを飛ぶ飛行機を見
上げた時の驚きをストレートに詠んでい
る。結句の「鉄のかたまり」という言葉
に迫力がある。

五月号作品三評

橘 美千代

小雀は水を飲まんと入りたるやバケツ
の中に溺れもがきをり 津田美知子
なんと哀れな胸の痛む光景だろう。す
ぐ救出したのだろうが果たして小雀は助
かったのか。気になる。結末を言わずに
読者の心に余韻を残す。三句目は「入り
たるか」か「入りたりや」ではないか。

小鳥達水も木の実もない大寒に正月飾
りの南天ねらう 谷田律子☆

餌も水もない大寒の時期は小鳥達も必
死なのだ。正月飾りの南天さえもつづく
のだろうか。可笑しみを誘われると同時
にいじらしさに胸が熱くなる。

誰もみぬ父母の墓所に声出して近況報
告す愚痴も交へて 井出裕子

残された子にとって父母の墓は父母そ
のもののようになる。心の拠り所として。
愚痴も含めて語りかけることで安らぎを
覚えるのだろう。誰もいないと思ったら
墓石の陰に人が、などということも。

団地内のいつもの場所に仲買の魚売の
声の聞かれずなりぬ 山崎 猛☆

昭和の残り香が漂うような団地。そこ
にかつては魚売りの声が聞こえていた。
人のぬくもりのあった当時のことを作者
は懐かしむ。平成から令和へと失われて
いった昭和の情景は多々ある。

プーチンに恫喝されて沈黙する世界に
苛立ち二年が経ちぬ 羽田孝輝

本当にそうだ。と同時に無力さを咬み
しめたものだ。いかに理屈を捏ねようと
ロシアのウクライナへの侵略の事実揺
るがない。そして核を有する国は攻撃さ
れず、核保有国同士は直接戦わないこと
も。ウクライナは欧米の対ロシアへの盾
か弾除けのようだ。日本もアメリカのそ
れにされぬよう賢明にならねば。

亡き母のセーター纏う叔母の辺に座れ
ば母似の声温かし 塚本節子☆

母娘や姉妹の声が似ていることはよく
ある。もう聞くことのできない母の声を
受け継いだ母の妹。その声を聞き、作者
は母の傍らに居るかのような安らぎに包

まれて。やさしくて切なく美しい。

碁敵の微笑む遺影を前にして「もう一
番」の手合せはずむ 越澤太郎☆

ひたすら真剣に勝負する相手である碁
敵とはかけがえのない存在なのだろう。
純粹な交わりゆえに。碁敵の遺影の前で
「もう一番」の手合わせをする。かつて
の勝負の記憶が蘇り充実の時が流れる。

「きたあかり」ジャガの農家は早植え
と芽出し種芋畝に並べる 同

きたあかりとは北海道産のじゃがいも
の一種で男爵芋を改良したもの。ほくほ
くとした食感で甘味があり「栗じゃが」
とも呼ばれる。早植えのため芽の出た種
芋を畝に並べて気合いが入る様。農作業
の手順を示す素朴な下の句が魅力的だ。
ひよどりが毎朝来てはのらぼう菜をつ
いばみてゆく役に立ったか

永井亨子☆

のらぼう菜はアブラナ科アブラナ属の
野菜で江戸東京野菜の一つ。自分の作っ
た菜がひよどりの食糧になり役に立った
と喜ぶ作者。温かくほつとする歌だ。

作品二

義兄を送る

小林 芳枝 東京

玄関で転び緊急入院し退院し再入院して四ヶ月ほど
痛むことも苦しむこともなかったとまた姉は言ひ吾はうなづく
八十九歳老衰とあり穏やかに天寿といふを全うしたり
食事のあとすぐに眠りてゐたといふ延長ならむ棺にねむる
父も母も世話になりたり目を会はずことなき顔に諸手をあはす
四人姉妹のわれらに兄の出来たこと嬉しかつたねわくわくしたね
此処は芳枝さんの家なんだから何時も来てと見送りくれき一人の吾を
濃くうすく影は動きぬ逝といふ文字を幾度も書き続けりて

梶 尾 栄子 兵庫

明日からは連休に入るとふ退け時の人も車も弾みてあたり
何彼につけて欲気の減りぬ筈を猪にごつそり掠はれしことも
春の花咲き盛る庭に居てわれも寂しさ堪へ踏み出さむ一步
上流に桜木あらむ溝川に花筏ゆるり流れ来たりぬ
散り敷ける桜花びらの上を走るためらひつつも速度落として
教室に前のめりになり将棋指す男性の中紅一点の見ゆ

玄関のチャイムは鳴るもなかなか待つてましたといかぬこの頃
降り立てる首相夫妻の前髪風の風に乱るアメリカの風に

石 渡 静 夫 ☆ 茨城

暫くは家を建てぬと言いながら地主は撤回す一年後と
耕して肥料を入れて作物の実るまでして返すは惜しく
突然に空の面積狭くなる新築工事の足場組まれて
早朝の常磐道の下り線乗用車の列北へ北へと(五月三日)
奥久慈の山々新緑鮮やかに久慈川沿いのドライブ楽し
万緑の陰しき峰を目指しつつすい登る妻と娘は(生瀬富士)
絶壁の尾根の先なるジャンルム最後尾の吾慎重に行く
茨城のジャンルムなる生瀬富士四つん這いから手を離し立つ

三 好 規 子 神奈川

その途中に逝ぎにし義母を思ひつつ胃カメラ検査の喉の麻酔うく
左下に寐ねたるままの恰好にて検査医師を待つ二十分餘り
あまりにも胃カメラ検査の医師おそく麻酔のスプレー二回受けた
長男や次男長女と四人揃ひ画面にて話す我の今後を
今日よりは遠く離れて京に住む女孫見送る涙隠して
歩き方を理学療法士に教はりて桜はなびら浴びつつ散歩
道一面しかれみし桜よべの風に寄せられて盛るそちらこちらに
二十六度と豫報の四月の電柱の長く伸びる影ふみ歩く

五月号 十首選

冬雷集 益坂 順子

これからの老いを活かしてどう詠ふ初
めてのこと戸惑ふばかり 赤羽佳年
朝よりの雨に木の芽の赤らみがびつし
り目立っただれ桜に 山崎英子
片付けをせぬまま嬶倒れゐて家具の全
てを処分されをり 青木初子
吾妻より茜のベールが町おほひ「生み
たて、たまご」の売り声のどか

山口 嵩

グレイヘアも選択肢として美容院で髪
色明るく冒険のひとつ 高松美智子 ☆
明け方にいつも親しき鳥の声届くこと
なし十階までは 大塚亮子

西日受け引き取られゆく自動車の
ティールランブの滲む雪道 嶋田正之
広辞苑「蟬」の例示にみんみのあら
ぬに気づくあれほど鳴くに 稲田正康
あくびより短き交尾終わらせて鳩の夫
婦は日なたに並ぶ

ブレイクあざき ☆

たばこの煙染みたる柱義父住みし部屋
にわたしの残生はあり 井上菅子

五月号 十首選

五月集／残響集 山口 嵩

雨のあと嘗ての石白みづ湛へ梅の花び
ら乗せて明るむ 益坂順子
山裾のわが畑早も日の陰りニキロ先な
るビルの輝く 梶尾栄子
文句言ふひと居らずに片付かぬもの
の増えゆく上がり口あたり

齋鹿ミヤコ

単純な遊び飽きずにくり返す待合室の
幼の笑顔 加藤富子 ☆
記念誌の「人生歳時記」寄稿文同世代
なる境地にうなづく 西村邦子

口論の胸の高鳴り鎮めんと大人の童謡
スマホに流す 野口秀子

野の原に星空からの贈り物白き小花の
一面に咲く 吉岡松世

ものなべて放りたくなる時ありぬ思ひ
なほせば又意欲わく 佐々木政子
玄関に主まち居る老犬が反応少なに我
を見つめる 後藤恭介 ☆

薬局のアプリのクーポン活用し更に得
ありスマホ決済 金子八重子 ☆

小林 貞子 山形

馬鈴薯を定植のあさ里山に初の黄砂が煙りて降り来
黄砂降れど少年達はボール追ふ喉にわろしと一人気を揉む
桜木へ黄砂と雨のおほあらし草間にまろぶ花弁の毬
白と黄の花の百合根を深く植う去年掘り上げし大球小球
一本の軸に二枚のブラインド糸擦りきれて窓に古びぬ
ブラインド素人工事に付けかへて何か嬉しき厨の窓辺
夏櫬の挿し木に小さき花二つ見逃しさうな微かな白さ
花時がまた巡りきて心急く二人の義兄の法会は間近
向日葵の花はいづくやウクライナ地は砲弾に抉られ裂かれ

早乙女 イ チ ☆ 栃木

みどりの新葉の中にミカンの花咲いていたのか知らないうちに
花の中の小さなまいるミカンの実早く大きくなるの楽しみ
柚子の木の下に花びらおちていて見上げて見れば白い花いっぱい
ばあちゃん草むしりなどしないでと長男が言うから我慢してる

東 ミ チ 青森

傘をさし指折りながら横切りぬもしや歌詠む人やもしれぬ
確かなる予報に合はせて苗植うる春雨しづかに期待とならず
春雨のやさしく細く降る一日芍薬の茎のびて葉もひらく
嘔吐の続くを見ぬふり出来ず十七歳の猫を抱きて病院にゆく

五月号 十首選

作品 一 石渡 静夫

冷蔵庫の隅に眠る菜の花は黄の花咲き
ひっそりと春 野崎礼子 ☆
早春の朝の食器を洗うとき蛇口に映る
小さきわが顔 糸賀浩子 ☆
ねこやなぎ梅の花添へヘルパーさん沈
みし心を癒してくれぬ 岩淵綾子
庭すみの黄色すいせん十個咲く好みの
花にはさみをいれず 矢野 操 ☆
いつもとは違ふ義母の行動をもつとも
つと気に掛けてゐたら 村上美江
粉こねて母の作りしドーナツの生地は
耳朶の固さと言ひあき 稲津孝子
木星の輝きみゆる窓ガラスに私が映る
ひとりのわたし 大塚照美
雛あられ買ひ来て雛に一袋われ一袋ま
づは味見を 吉村昌子
枝垂れ梅の向かうに立ちてゐる人と目
が合ひ小さき会釈を交す 中島千加子
弁当にクリーニングに生活のをちこち
漂ふ値上げの表示 中村哲也

五月号 十首選

作品 二 大塚 亮子

四十万の河津桜の便りあり春への足音
にはかに近し 本間志津子
夕食をたらふく食べて少量の日本酒に
酔う春兆す日は 石渡静夫 ☆
枝先に付きあふる赤き木瓜の芽が今朝の
霧水を纏ひ輝く 佐藤幸子
作物を作らぬ畑を広々と紫に染め仏の
座咲く 須藤紀子
なくなればいいもの武器と独裁者悪徳
宗教麻薬や貧困 植松千恵子
この桜見せてやりたき者ありぬしみじ
み眺む橋の上より 山本述子
胸塞ぐ能登の惨事の映像がテレビ消し
ても我が眼に残る 川上美智子 ☆
ベッドに寝る兄が好み的大判焼枕辺に
置けば微かに笑ふ 大野 茜
ポストまで上着わするあたたかさ霧
たちこむる春分の朝 松本英夫
年明けて畑に行けば大根もかぶも遅ま
きなれど育ちおり 児玉孝子 ☆

森の観察会

山本 述子 神奈川

原つばに白詰草が咲き満ちて孫に教へる冠と輪飾り
農道に春泥を落としつつ行くは昔は牛車今は耕運機
走りゆくピンクや水色のランドセル疲れをしらぬ新一年生
義母思ふ分葱のぬたが好物で茹や筍よく薄味で
よく読むは歳時記なる季語の本季節に纏はる言葉の宝庫
黄緑の御衣黄といふ桜見る少し手折りて押し花楽しむ
土くれをどかして掘つて覗きたる赤芽芋の芽見えてもう春
小網代の生き物達に貰へる深き安らぎと大いなる英気

作品 三 天野 克彦

雪積り家々の屋根白くなり眩しき一日
雲ひとつ無く 松崎みき子
豌豆の殻の中には秩序あり左右交互に
実付き納まる 小田原禮子
無念なる姿を晒すは望むまい別れの時
と友の手をとる 新井光雄☆
百までを生きむ夢にて野を行けば林檎
の芽吹きわれを励ます 水澤タカ子
小雪降る一月半ば牡丹の芽わづかにふ
ふむ薄紅に 奥山清子
幼き頃職持つ母は編み機もて吾のセー
ター作りくれたり 津田美知子
アイヌの村亡き母と訪ひし速き日を思
ひて歩く雪降る広場 井出祐子
若き日の試験で覚えし赤彦の歌は今で
もすべてが言える 山崎 猛☆
鳥一羽さえも見かけぬ冬の田につくば
風の渦巻きており 塚本節子☆
低空を飛ぶ飛行機の圧迫感グンとせま
りくる鉄のかたまり 永井享子☆

山藤の新緑に溶け控へ目に時に逞し大和の花なり
鶯の声高らかに森の中警戒の音と最近覚ゆ

山躑躅花の盛りと思へども昨年の数には及ばず淋し

小川沿ひに羽化したばかりの河蜻蛉低空飛行で吾が先を行く

農家より路手に入り日替りの田舎料理に癒されをりぬ

四月より顔馴染み増すスクールガード交はす挨拶タイミング合ふ

団地庭に樹齢四十年の大躑躅見事に並び咲き揃ひをり

桜もみぢ 松本 英夫 東京

移り来て桜もみぢを二十年重ね来たればここが我が街

冬至すぎ深さ増しゆく朝の闇めぐる季思ふ新聞を手に

カウンターの白髪一本光りゐて入道雲湧く梅雨の晴れ間に

処暑すぎておせちの案内そこに溜息つきつつ正月思ふ

屋根たたく嵐のしぶきは真つ白に渦巻き逆巻き阿修羅のごとし

あるはずの糸をたぐれど歌手の名はぷつりと切れて二度とかへらず

たしか三条五条十条と重ねて出でたる赤羽十条商店街

佐藤 靖子 東京

手術後の兄が煮てゐる大納言見舞のわれとつくる牡丹餅

ながいこと蝦蛄食べをらずせいこがにからすみなども思ふのみに足る

断りの「大丈夫」を言ふ人のよほど忙て二度つづけたり

筆記体ならよどみなく書く単語ブロック体にはたどすなり

左右の目に薬別回数もメモ忘れなば差したか分かず

南町奉行所跡はここなのか五〇〇歩ほど先と捉へをりしが

駅にある「だれでもトイレ」の表示など「どこでもドア」が元にあるらむ

鈴木 計子 東京

六箇所に転移があるといふ友のたより途絶えて正月過ぎつ

案じゐる友のはがきが届きたり踏んぎりつきて治療やめると

にこやかに苦笑まふ絵はがきを治療やめたる友に出したり

名のみ知るキチジは父の名前にてけふ映像にその魚みつ

キンキとも言はるるキチジはスズキ目あらまあ父は鈴木吉次よ

味ねだん良しとて東の横綱と言はるるキチジは父と同じ名

横綱の東はキチジ西は何アカムツ即ちのどぐろと知る

寄りてみる鮮魚売場にみつけたりキンキの名にて並ぶキチジを

永野 雅子☆ 東京

詳細な二十四時間心電図計測機器をつけられたる母

腰にある計測機器が気にかかり何度も何度も母は触りぬ

計測器を外してよいかと問う母に明日迄駄目と何度も話す

両膝の痛みに筋トレ始めたり週一通いで痛み軽減す

筋トレの最終目標は体重減すぐに減らねど脇腹すつきり

週一で効果出るかと不安なれど励まされつつ八ヶ月経つ

筋トレに通う効果があらわれて次に行く日を決める楽しく

歌集/歌書 御礼

編集室・佐藤靖子

■武田 豊歌集『抱える棘』

令和六年二月二十六日発行、四三六
首の第一歌集。著者の短歌始めは退職
後の六十歳から。講座を受けながら結
社には属さず十年余りで出版にこぎつ
けた。しかもその間は資格を利用して
第二の仕事に励み、また大学の仏教学
部の聴講生でもあった。

勤め・四季・旅・くらし・非日常と
作品を仕分ける編集で、読者にとって
理解の助けになる。

仕事の歌の背景にはオイルショッ
ク、サリン、アメリカ同時多発テロ、
学生運動時代が見える。

営業の車にガソリン手に出来ず石
油会社に着く益なし

同僚と酒場のビールに声上げて二
杯目以降は愚痴を言い合う

グバ棒もドライバーをも持て余し
ゴルフ人生チョコに始まる

勤め先に合併話進みいて早期退職
たがいに窺う

「せんせい」と急に吾呼ぶカフェの席七十年前思い出す園児
初夏の風受けて自転車ペダル踏み新茶買わむと茶店に向かう
夏野菜植える畑の整うに己の力に成りて安堵す

トマト茄子胡瓜ピーマン苗を買い息子の手を借り植え終う夏日
初めての給料いただく孫娘今宵の夕食奢りくれたり

偏西風にのりくる黄砂躊躇わず美しき日本を汚しけぶらう
わが蒔けるネモフィラ育ち咲く花壇蒼き色澄む朝の花群

緑濃き遠くの山を見ていたら何処かへ行きたく旅の本開く
夏野菜の苗を五種類買い求め思いは豊作丁寧に植える

近所からいただいた筍のごちそうは豊かすぎるだけのこづくし
雲行きが怪しくなりて小さなトマト苗と空と交互に目がゆく

ジャーマンアイリスきれいですねと声かけられ見知らぬ人と花のこと話す
予定なしそれでも大型連休は各地の話題に気分が上がる

雨止めば庭の緑はより濃くて皐月の赤が雫に際立つ
朝からの気温も上がり夏の空冷し中華を昼に用意す

竹の子を思はすやうに伸びてをり一ヶ月前に会ひし女童
自転車の前と後ろに子を乗せて行く人の肩にさくらはなびら

大前の友の姿に励まされ矢を放つ弦の音ひびかせて

朝採りのグリーンピースでつくられし昭和の色の疵の弁当

とよがはの風をはらめる鯉のぼりあまた泳げり意気揚揚と

『大川端奇譚』を思ふ穏やかにすべてをつつみ川は流れる

「大川」の桜祭りに孫歌う「たま」の曲聴き夜「シカゴ」観る

「重いぞ」と一升餅は粒立ちて齢一つの児の背に乗りぬ

「ギタリスト デイッキーマン・ベッツ」死の報に埋もれたままのレコード探す

中耳炎三十八度五分の熱母に抱かれ幼子は泣く

陽は落ちて紅きパイロン並び立つ工事現場に十九時の風

若葉萌え思い出すこと一つ有り柿の葉寿司を作りし夜を

If we hold on together に思ひ出づつつ浮かびきてスマホに検索ピアノ曲写譜す

弱火にて時掛けて沸かす白湯は舌にまろやか喉流れおつ

湯呑みに注ぎ両手に包めばぬくぬくし南天の絵柄を回し愛でたり

真白なる朝日連峰くきやかに五月の朝の窓を遥かに

「海くーん」と呼べば振り返る二歳児をパチリと一枚桜の土手に

日浴みつつ庭の菜園にアスパラを数本摘みて食卓に添ふ

見えぬもの見ようと仰ぐ半月に Slim は隠る四回目の越夜を

うす紫に咲く都忘れ訪れし娘の嫁ぎ先の玄関にも見し

退職の引き継ぎ終えて社を後に駅
への道を常のごと歩む
くらしの頃から。

長き経に欠伸かみ殺し手を合わす
厳しき亡母^{はは}になお黙けらる

一對の妻と求めしこけしあり割れ
たる一つやはり捨てえず

禁酒日の眠れぬ夜にラジオかけ零
時を待ちつつ厨に立ちぬ

軍備を見せびらかす国、環境への思
い、いつ非日常に見舞われるか。

映像の平壤市街は祭りめくミサイ
ル発射のテロップ流れて

原発に使われる石油納めしこと職
退きてなお脳裏に残る

国後に演習の砲火とどろきぬ日本
もロシアの隣りにし在り

(ながらみ書房刊)

針谷哲純歌集『遊走子料理帖』

はりがいてつすみと読む。令和六年
三月二十五日発行の第三歌集。見出し
九五、一六、二六首が収められている。
理系の学問をし計画制御の会社勤務。
古典礼法を学ぶとプロフィールにあ

る。短歌人会、現代短歌舟の会編集委
員、グループ金星所屬。

全体を見て先ず目についたのが元
素の歌で第一周期から第七周期まで
一〇八種を詠っている。

4 Be

ミサイルは費用かさむも毒もつも
二のこととしてベリリウム使ふ

10 Ne

鮮やかにネオンの赤を灯すべく庄
を加へむ一万ボルト

19 K

バナナよりあはれ放射線いづるな
ど知らず喰ひきしカリウム40

24 Cr

ルビーの赤エメラルドの緑つかさ
どるクロムはまこと「色」の化身よ
衣類や食のことも「堂奥に入る」と
いう感じが伝わってくる。

いまは亡き丸元淑生にみちびかれ

「有次」^{ありつぐ} 買ひて男の料理

自然薯を堅き山椒のすりこぎに針
打つごとく摺りおろしたり

伊那に干す寒天つかひ伊豆の人わ
れはつくりぬ牛乳かんを

安川 敏 子☆ 埼玉

雨上がり艶やかに咲く白つつじ園遊会の愛子様の笑顔
でかけよう晴れて風なくリハビリに歩いて銀行その後買物
空模様IT進化の効なくて日毎の予報もはずれと当り
尾長の巣空家の戸袋よりヒナ達の餌をせがんで鳴く声で知る
ハワイアン溢れる会場南国の衣装も華やか踊りに魅了さる
マンボNo.5リズムにのってワクワクとホールに響く男女の靴音
土産は初物スイカにデコボンと果物喜ぶ私を知る娘

西村 邦子 兵庫

ジヴェルニーに咲き散りたりし藤の花モネ展に見る白き花房
新しき風吹き込むやうに春が来てシニアカレッジ二年目となりぬ
カレッジに歳は聞かねど団塊の世代と思ふ人あり会話の中に
会ふことは遠く離れみて叶はねど月づきの歌に知るその人のこと
歌会の帰りのお喋り心地良き声が今でも耳に残りぬ
互ひに歳を重ねて幾年か孫らは皆育ちゆきたる
三人の女の孫そろひて大学生三人それぞれ個性を持ちて

江藤 ひさ子 大分

加齢とは斯くなるものぞ体力も智力も劣化その急速
あっ!!地震と叫んだ咄嗟埼玉の嫁から電話大丈夫ですかと
大丈夫よと即答するも唐突の震度の四にこころ乱れつ

伝達の高速・広域沖縄の友も地震を氣遣ふ電話

ちさき小さき鈴蘭の花に良く似たる花が待たるどうだんつつじ
去年数個生りたるブルーベリーが豊作といふがに小さき実を並べみつ
雀どち御免なさいねブルーベリーをネットに覆ふ熟れないうちに

加藤 富 子☆ 栃木

二十年ぶり中学時代の友と逢う幸手の桜花曇りの昼に
憧れのチューリップ畑見るツアー決断するも満席という
キャンセルが出たと連絡旅行社より休み確保してすぐに参加す
この旅も優しき神の恵みありカラリと晴れて爽やかな風
花巡りというテーマのある旅は圧倒的に女性の多し
砺波市のチューリップフェアは数多なる種類と色に溢れ輝く

齋 鹿 ミヤコ 神奈川

襟を立てブローチさして隠したし隠したつもりの首の年齢
電話にて互ひに訊くは体調のことが増えたりこの頃のこと
下腹に少し力の出でてきて近くの桜へ今日は歩きぬ
横紋筋融解症の副作用主治医はまともに聴きてはくれず
窓にみる柿の葉つばの繁りきて朝のひかりに影をつくりぬ
劇場のわが席のすぐ側を平服のマルガレーテ女王歩まれたりき
女王は生前継承なされたり新聞に知る息子のフレデリック国王
詐欺被害にも補償のあるらし被害者に故意とミスのなければといふ

浅草の既成の足袋にあきたらず向
島にて足袋をあつらふ

趣味であろうか。端然とした所作を
思わせる。

和の紙を折り目たがへず折ってゆ
く手わざ支ふは正坐に如かず
てまとひまかさねぬりにし腕うち
にうるしの赤のたたずみあたり

以上、平らかに読める歌を挙げてみ
た。元素の項では自然と水兵リーベ
の船と口ずさんで懐かしかった。

(不識書院刊)

■市田柳子歌集『木曾の川霧』

令和六年二月九日発行の第一歌集。
四二一首を収めている。これまで仕事
一筋にきて七十歳になったのを機に潤
いを求めて「彩雲」に所属。古希から
喜寿までの作品であるが、短期間にこ
こまでできたことは、真面目に打ち込ん
だ証と感じる。次の歌は大きな賞の受
賞作品という。著者を包む自然環境が
見える。

山あひを縫ひて流るる木曾川の位
置を示して霧のかかれり

山膚を這ひ上がりくる川霧に視界
阻まれ速度を落とす

作品からは活動的な姿を感じるが、
実は病と戦っている様子だ。

栄養の不足きはまり処方うく栄養
剤にて腹のふくらむ

私の身にどれだけの負荷かけある
や薬と言ふ名の毒あまた飲む

それでもきちんと家事その他をきり
もりする姿がある。

梅雨あけて一番先に草取りぬ家の
顔なる玄関の前

鍬持ちて日々戦ふは草にして人に
はあらず心安らぐ

北側の廊下は臨時の冷蔵庫お節に
お酒何でもござる

次々と不具合起くる我が愛車十九
万キロをとともに走り来ぬ

“民のために良かれ”もちよつと迷
惑を感じたりしつつ…。

防災日電話の音に起こされて体調
乱す「安否確認」

平和のなかに居ながら心はいつも平
和を願う。

禍を包むがごとく降る雪に平和を

作品三

小田原 禮子 福岡

寝入りたる我を起こせりアラム音四国の地震福岡も揺れ
あの日から十三年の経つといふ五百日切る万博までは

この年は制限なしの祭りとふ花自動車はアンパンマンで
クキクキと首手足曲げ踊る^{ケイポップ}ヘビOPらしどんたく広場
カンパニユラ風鈴に似る花一本売れ残りをりレジ籠に入る
三日ぶり雨上がりたる家の前雀の声すいつもの群れか

体重史

新井 光 雄 ☆ 東京

大学を出たころ体重六十二キロや小太りの二十三歳

商売が新聞記者でも酒飲めず常に大盛り六十年前

朝メシの後は十時に立ち食いをさらに昼メシ晩メシ夜食と

朝メシは警察近くの仕出し屋で囚われ人と同じ定食

仕出し屋のオヤジがいつしか顔馴染み一品佃煮足してくれたり

体重は正直者よぐんぐんと面白いほど八十キロ超す

結婚し痩せろと言われ香川式従いたればあつさり減量

半年で十キロほどが吹き飛んであとはゆつたり六十を割る

谷 田 律 子 ☆ 栃木

防寒でオシヤレをやめる五月雨ズボンにくつ下の除草スタイル

枯草をどかした下に芽をふいた春の兆しのチューリップと和水仙

二階より階下の椿見おろせば新芽をふきて古き葉ちらす

八十キロ飛ばして走る東北従貫道大型気にして左側に行く

二時間をかけて画材の店さがしつつ初めての道太田まで

食事さえ忘れる程に好きな事草花の世話と除草の仕事

花日和仕事着ぬいで「お召し」に着替えしばらくぶりのお茶の会に行く

佐々木 政子 岩手

いかやうに国はあれども桜咲く先づは花見と友誘ひ呉る

桜花満開なれば故郷の濠のめぐりの桜木しのぶ

濃やかに春を色づく山々の故郷の山もかくありなむか

鶯の今日もさはやかに鳴き続く山にはあらず家居にてきく

鶯の鳴きてゐるのは葉の繁るあの木らしきも姿の見えず

娘二人に迷惑かけぬを念頭に自ら移りぬ望まぬ施設へ

百合の花一輪描きしを夫褒めにきなほ捨て難き十三回忌

音ひきて上る花火の開くとき見つつ期待す次は何色

井 上 鈴 子 山形

レース越しに淡雪置くと見紛ひぬ淡黄色の水仙一面

桜花の一斉に咲き膨らみて里の空間狭くなりたり

桜の頃兄が来ぬかと取りおきし「さくら廻廊」のチラシを眺む

漣油採りが楽しと兄言ひきサークル仲間へ土産にせむと

をととしは土砂崩れなく兄も居て山菜採りは心弾みぬ

祈る元旦の朝

長崎の鐘に合はせて黙祷すベッド
に迎ふる原爆記念日

「書肆 露滴房（鳴海出版内）刊」

歌集『木曾の川霧』市田柳子著

桜井美保子

ある日、届いた包みを開けると紺の
濃淡でデザインされた本の表紙が目
飛び込んで来た。市田柳子氏の歌集『木
曾の川霧』だった。歌集の最初に置か
れた作品は木曾川を詠んだ一首。

山あひを縫ひて流るる木曾川の位
置を示して霧のかかれり

川に立つ霧が木曾川の存在を示して
いる。自然が作り出す幻想的な風景。

侵略と戦ふ国の支援には武器より
他の道なかりしや

免許証の返納待てと警察署「所持」
へと舵きり籠るを防ぐ

もの言へぬ鯉のぼりなるがそよぎ
つつ平和の祈り世に伝へあむ

これらの歌からは、政治や社会への

視線の鋭さを感じる。誰でも心の中で、
ふっと思うことはあるが、歌にするに
は確固たる信念や見解を持つていなか
ればできないことである。

ITについてゆかれぬ若い人に優
しくはなきこの世の進化
わがエコの根つこにあるは貧乏性

「勿体ない」が貼り付きてをり
改札でマナカをかざし通り抜くそ
の瞬間の私は若い

我が声は期待の声と違ふのか無言
で切れる電話時どき
日常詠の中から印象の深い作品を幾
つか挙げた。生活に関連する設備の利
用や買物などでもIT化が進み、高齢
の世代には戸惑うことが多いが、三首
目の改札を抜ける歌などは難なくマナ
カを使いこなして颯爽としている。

物を無駄なく使うエコも実は体に染
みついた「勿体ない」の精神から。歯
切れの良いリズムで歌われ、しかもほ
のかなユーモアを湛えている。四首目
の電話の歌も切り口が独特である。

親指と小指がつかぬ我が手なり病
の神はいたずらにして

突然に息子は蕨の戻し方教へてと言ふまづ蕨採りす
取り取りのチューリップ咲く庭隅に白く小さき満天星躑躅
母の求めし輪島塗りの吸物椀三人で分け普段使ひに

奥山清子 山形

縁どりに真白きビオラ植ゑ終へて一服すれば空気の旨し
花大根紫深く畑の辺に種も蒔かぬに今年も生ふる

目の前の社に鶯の初音聞く透析の夫見送る朝に

朝刊に「市町村四割将来消滅」の記事載りて該当内のわが町（四月二十五日）

「八乙女八幡宮」の種まきザクラ咲き満ちて閑かな街も暫し賑はふ

頂きたる竹の子料理のオンパレード小指の爪まで春満喫す

みどりの日息子の車快走す真つ白な「月山」間近に見つつ

井出裕子 静岡

戦没者慰霊碑に名を刻まれし父と再会す兵庫の翁

慰霊碑に刻まれし父の名をなぞり五歳に戻れる翁のまなこ

村井さんの長き戦争終れるか「納得できた」と笑顔で応ふ

水俣病の患者らと国の懇親会溢るる思ひもマイク切られぬ

環境省謝罪してもなほ患者への向き合ひ方に疑問符消えず

水俣病約七十年経て患者らの心の傷は深まりたらむ

石牟礼氏彼岸にて今何思ふ国の暴卒に声を聴きたし

羽田孝輝 山形

新緑の葉山の嶺の向かうにはまだ白銀の飯豊望めり

若葉萌ゆる輝く緑眺むればただそれだけで気持ち浮き立つ

春半ば葉山の嶺の残雪も黄砂に煙り黄色に霞む

カモシカとつばさ衝突のニュースありカモシカの怪我何も報じず

同年の君と過ごせし保育園遺影を前にむかしを思ふ

西山に沈む夕陽に顔顰め今日も一汗マシンを歩く

大谷のホームラン見て今日もまた力身に満つ朝の始まり

高藤朱美☆ 茨城

我が街もたまにTVに登場し月九のドラマに釘付けとなる

新幹線に座りて探すシートベルト思わず笑みて孫と目合わす

ひとしづく頬に残れる涙あと保育園での男孫気づかう

娘や孫とグリコの看板めざし行きTVでなじみの青年は走る

息子等と七人揃いて中華食む男孫の成長にみなはほころぶ

二万歩を苦痛も無くて街めぐる旅の導き癖になりそう

警報を知りて大雨降る前に馴染みの桜を愛でるひととき

山崎 猛☆ 埼玉

春と秋短くなって来たような五月は夏日の気温が続く

消炭の中にくべたる焼き芋の香りと母の背なか懐かし

今回は病に臥せる友のもと記念写真と寄せ書き送る

枕もと半寿の祝い届ければ床ずれ痛しと涙ぐむなり

八芳園のさくら満開青空より三百年の盆栽に降る

学校から帰る孫の顔紅潮し重きランドセル投げ捨ててゆく

眠る間に溜りし痰の排出の朝の苦
行がまたも始まる

闘病が続けば心が折れそうになるか
もしれないが、ユーモアを漂わせた歌
には明るさがあり、何とか苦難を越え
ようとする気持が伝わってくる。

足早に車椅子押しカート引く二刀
流なるナース逞し

一日に何度言ひしや「ありがとう」
回数分の手助けを受く

手術日は「十三日の金曜日」気に
するなかれ我れ仏教徒

入院生活が見えるようである。ここ
でも前向きに生きる姿が感じられ、読
む側も励まされる。

側溝の三十キロの蓋上ぐる水の力
を雨知らしめる

庭の辺のぬすびと萩は種結び服に
貼りつく髪に貼り付く

こうした作品も生活の中から生まれ
ており、個性的な捉え方が面白い。

本集は喜寿を迎えた記念に出版され
たという著者の第一歌集である。短歌
を詠み始めてから七年、着実に歩ん
でこられた。巻末に「彩雲」主宰の田中

伸治氏の丁寧な解説があり楽しく鑑賞
することができた。著者から思いがけ
なく歌集を頂いた御礼を申し上げると
ともに、さらなる前進を期待してい
るところである。
(彩雲叢書第十篇)

歌集『風の音』佐々木伸彦著

小林 芳枝

一九四〇年生れで歌は中学時代から
始めたという著者は佐渡ヶ島で広く短
歌に関わる活動をされていて、この歌
集には第一歌集『水の音』以後の十数
年間の作品が収められている。

朝ごとにトキ舞ひおりて餌あさる
耕起はじまる水田を巡る

竹垣の朽ちてかたむく畑裾の風除
け直す雪とける日は

雪原にみどり葉たてるブロッコリー
風にゆられて初日を返す

夏雲を海面に映す朝なぎをジェッ
トホイルは東に進む

佐渡を知らない私も憶れる心地よい

立 石 節 子 ☆ 東京

ホームでは最前列に並ばずと刑事した人しみじみと言う
桜ふぶきの湯殿川辺にシート敷きコーラス仲間と大きく歌う
風の中枝垂桜が頬打つも和音気にかけ声張り上げて
リュートの優しい音色に癒されて幸せな日を思いて眠る
ソプラノも聴きづらきほど遠き耳友と自覚す年相応と

塚 本 節 子 ☆ 茨城

重なりて重なり合いても透けて見ゆ柿の若葉は朝の陽あびて
アガパンサスのうす紫の花咲きぬ夕日のなかにティアラのごとく
初鰹の便りあるたび思い出す届けくれにし那珂湊の叔父を
ピザをちぎり三歳の女孫のひとりごと「もったいないからきれいに食べるの」
指くわえ居眠りしつつ三歳の女孫「もったいないからもっと遊ぶの」

笠 岡 文 子 ☆ 広島

淋しくてせい一杯に咲きました無人の庭の一本の桜
墓参り母の思い出つきなくて四月の空にビロードのぼら
郁子の花垣根にそいて満開の白をこぼして楯円の実待つ
買物に足を引きずりハツとして姿勢を正し身を引きしめる
あっけなく友逝く知らせ不安なるゆめく心鎮められぬ夜

金 子 八重子 ☆ 千葉

缶ビール一本飲めば歌の出できょうの失敗リセットされたり
春の嵐過ぎて気温の急降下散歩する気のしない花冷え

ツアアウト満塁最後の一球をキャッチして泣く子に貰い泣き
カットして欲しい髪型伝わらず女優の写真ためらいつつ見す
洪滞のニュースは他人事連休は仕事に限ると今年も思う
悩み事解決せねばばんやりと笑いの番組音消して眺む

越 澤 太 朗 ☆ 茨城

早朝の庭の緑に囲まれて鶯の声独り聴きおり
牛久大仏と筑波の峰のツーショット「朗らか便り」に歌添えて載す
深掘りの畑の豊作予想してネギ苗土かけ丁寧にする
我が畑の野菜届けし食堂に子等の絵手紙笑顔届けぬ
筍の注文受けて掘り起こす旬の味なれば間髪容れず
綿雲のゆつくり流れ行く先は見定めぬまま畑に休む

首 藤 文 江 ☆ 埼玉

部屋中に筍ご飯の匂いして風に誘われ外に漂う
春だからやっぱり聞きたいビバルディあの日思い出よみがえらせて
地図広げ旅への想い巡らせる指でなぞりてわくわく気分
穴道湖の沿線沿いに眺むれば出雲の国の面影のこる
眺むるは原田泰治の絵のごとくシャッター押したいのどかな景色

片 桐 美穂子 ☆ 神奈川

コロナ下で作ったジグソーパズルにはステイホームの記憶とどまり
国宝を預かる緊張いかばかり代々続く冷泉の家
シュレッダー多くの秘密飲み込みて瞬時に吹雪の山に変えゆく

風景が広がっている。冬の厳しさを感じさせないこの爽やかさが佐渡に住み佐渡を愛する著者の思いなのだろう。鬼太鼓を舞ふ若者の足守るわらぢの鼻緒すり切れてとぶ

八十八の爺舞ひ出せば孫が舞ふ祭りの庭の門付け鬼太鼓

佐渡に古くから伝わるという鬼太鼓は家内安全や豊作を祈る神事で集落ごとに行われているようである。若者は鼻緒が擦り切れるまで踊り、祖父につられて孫も一緒に舞う祭りの様子が明るく詠まれている。

小四のあばれん坊の手の跡のつけはじめたる雪のかまくら
やはらかき白菜苗のみどり葉に虫の家族もいのちをつなぐ

病室の四階めざすきざしを友の見舞ひにふみしめのぼる

半世紀昔のままの夜具出して始末しかねるいだきものは

ひらがな表記になっている何気ない言葉の内からゆつくりと著者の思いが伝わってきて心にくる。

朝霧の深き湯宿にめざめあて二人

の話題は子や孫のこと

庭にたつ夏の残骸花がらを集めて運ぶ二人のくらし

汗涙ふきて流した五十年妻と二人でふるさと守る

千切りの大根を干す春の日の雲の流れを氣にする一日

地域の活動に参加して指導もされている日常は気の休まる間もない忙しさではないかと想像するが歌からはそんな焦りは感じられない。夫人との二人暮らしを楽しみながら静かに過ごす日常がさり気なく詠まれていて温かい。

限りあるいのちの終るまぎはまで歌詠みつつく人をめざしぬ
鈍行の電車選びて乗り込めるそんな生き方吾のいきざま

生きがひを探せる人の後につき伸びたつわらび籠にとり込む

自らの生き方や命を思う歌も詠む。「風の音」という連作から一首。

新緑の雑木林をゆさぶりにいつまでも続く連休の風

『喜怒哀楽書房刊』

永井享子☆東京

に見ゆ

色まぶたに残る

自信をなくす

心のゆとり

はたきもせず

岩村知康 長崎

間山を

てて烽火山あり

さみどりの映ゆ

、
続
く

に登り続ける

心深く吸ふ

とろひてをり

「艦島」と

冬雷大会のご案内

下車徒歩三分です。

日時 十月二十日（第三日曜日）

午前十時 開会

午後四時半
閉会

午後五時より
懇親会

とも会場の方へお運びください

大会費用

参加費 一〇〇〇円（会場費分担）

昼食代金 三〇〇〇円

懇親会参加者 八〇〇〇円

(当日受付にてお支払い下さい)

△冬雷短歌会▽

第63回冬雷大会用詠草

（未発表作品一首・冬雷に掲載予定のないもの）

[illegible][illegible]

☆楷書で分かり易くお書き下さい

お名前

ご住所

T

*大会には（出席・欠席）です。

（ご予約を○で囲んでください）

八月十日（土曜日）必着

* 本年は好評でありました特集「誌上冬雷大会」の企画はありません。是非とも会場の方へお運びください。

☆会員は全員出詠が義務づけられております。
出詠費 一〇〇〇円（詠草制作・郵送費）をそえて、
下記へお送り下さい。

送り先 〒125・0063 葛飾区白鳥四・十五・九・四〇九

小林芳枝宛



編集 後記

▽本年三月号から連載された大山編集長の『四斗樽』刊行以前の太田行蔵が今月号で最終回となった。「し」の使い方が正しいか否かはつきり示されていて理解しやすかった。歌を作る時にもこの連載を参考にしたいと思う。

▽冬雷大会開催が決まり大変楽しみである。交流を深めながら素晴らしい一日にしたいものである。皆様のご参加をお待ちします。

▽毎月の雑誌作りではまず手書き原稿のデータ化が必要である。私の担当欄で以前は手書きだった方がある日、スマホから原稿を送信してくださった。以来その方法で投稿されている。この場合、原稿はデータとして使えるので改めて入力が必要がない。スマホが使えれば原稿も送れることを皆様にお伝えしたい。

（桜井美保子）

▽五月現在、気温が急上昇し、真夏日もあつて、風薫る五月とはほど遠い。春が短くなった。今月は魚の歌が目についた。魚編に春と書いて鯖。春が旬である。残念ながら当地ではたまにしか店頭に見かけない。黒田さんの歌の鯖が美味しそうだ。川上さんは絶景のテラスで、鯛とかんぱちの養殖の入江を臨み初鯉のランチ。魚好きにはたまらない。鈴木さんはスズキ目の魚キチジは東の横綱キンキのこと。西のアカムツはノドグロだ。新潟県もノドグロの産地だ。塩釜焼きが美味。（橘 美千代）

▽十月二十日に冬雷大会の開催を決めた。場所もいつも通り地下鉄東西線「東陽町」のホテル・ルートイン東京になる。本号にその案内と詠草投稿用紙を綴じ込んだ。

▽今年はこのところずっと継続してきた「誌上冬雷大会・特集」の予定は無い。できるだけ会場の方へ足を運んで頂きたい。

▽国内は海外からの観光客が溢れ

ていると言う。八十年近く外国との戦争をしない国、四季がはつきりして冬の雪山スキー、春の桜、夏の花や山、そして秋の紅葉と、みどころいっぱい。歴史的な円安が続く物価は考えられないほど安いのだと言う。様々なことを驚きを持って体験するらしい。

▽今月も本文64ページで収まった。

出詠者数減もあつて作品欄の頁が減っている。が、これ以上は減らずキープしたいのでご協力をお願いする。新会員のご紹介は歓迎だが、短歌作品以外の文章投稿ももつとあつて良い。（大山敏夫）

▽五月二十二日に六月号の発送をした。何時ものように封筒に入れないながら本が軽くなっていることに気付いた。編集を変えて八頁減らしたのだから当然なのだが感触が随分違っていた。軽くなった分だけ作業は楽になり、贈呈している友人からは纏まっていたいいね、と感想が来て嬉しくなった。

▽三月号から掲載されていた編集

長の『四斗樽』刊行以前の太田行蔵が今回で終了する。楽しみにしていた読物であり「し」の使い方は微妙なところで難しいこともあったのだが、歌に○×をつけて検証されているので分かり易い。掲載誌を手元に置いて学びたい。

▽今年の冬雷大会開催日が発表された。過ぎた日を考えると十月までは決して長くない。年に一度お会いできることはとても楽しみにしているが、その日までの準備は沢山あるので一つずつ気を引き締めて取り組みたい。毎年、詠草を送って下さる時に出詠費を忘れて居られる方が数名あります。封をする前に必ず確認をして下さるようお願いいたします。（小林芳枝）

▽誤植訂正（六月号）

47頁 鈴木計子氏二首目第四句、踏みనికి ↓ 摘みにき
▽御寄附厚く御礼申し上げます。
磯田ひさ子様 石渡静夫
飯嶋久子

《冬雷規定・掲載用》

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。（代表は大山敏夫）
- 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。（事務局は副代表を兼務）
- 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。
- 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
- 一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。
- 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
- 一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。
- 一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。
- 一、会費は年額（購読料を含む）次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。
*会費は原則として振替にて納入する事。
A 作品三欄所属会員 一四〇〇〇円
B 作品二欄所属会員 一七〇〇〇円
C 作品一欄所属会員 二〇〇〇〇円
D 維持会員（二部購入）二六〇〇〇円
E 購読会員 八〇〇〇円
- 一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

- 一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。
冬雷集・作品三欄（メール投稿分）
作品一欄 ・担当 大山 敏夫
作品二欄・作品三欄（手書き投稿分） ・担当 桜井美保子
・担当 小林 芳枝
一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
一、無料で添削に応じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。
《Eメールでの投稿案内》
白地に一首ずつベタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。
Eメールによる投稿は左記で対応する。
大山 敏夫 tourai-ooyama@nifty.com
小林 芳枝 kysie@nifty.com
桜井美保子 mhoko496@s4.dion.ne.jp

《選者住所》	大山 敏夫	350-1142 川越市藤間	540-2-207	☎	090-2565-2263
	小林 芳枝	125-0063 葛飾区白鳥	4-15-9-409	☎	03-3604-3655
	桜井美保子	235-0022 横浜市磯子区汐見台	2-2-2-608	☎	090-6029-0590

2024年7月1日発行

編集発行人 大山 敏夫
データ制作 冬雷編集室
印刷・製本 (株) ローヤル企画
発行所 冬雷短歌会
350-1142 川越市藤間 540-2-207
電話 049-247-1789
事務局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
振替 00140-8-92027
ホームページ <http://www.tourai.jp>

頒 価 700 円